

太田遺跡第1次発掘調査報告書

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



太田遺跡第1次発掘調査報告書

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

は し が き

今回、報告書を上梓するに至った調整池等建設工事に伴う太田遺跡第1次調査地点(八尾市太田九丁目)は、調査時の平成4年時点では、東西方向に流下する新大和川により分断された太田遺跡範囲の南端部に位置していました。

遺跡範囲の南端部で市境を画する藤井寺市域では、昭和48年に藤井寺市津堂三丁目で行われた府立藤井寺高校の建築に伴う事前調査で、弥生時代から平安時代の遺構・遺物が検出され、津堂遺跡として周知されるようになりました。

津堂遺跡内では、大阪府教育委員会・藤井寺市教育委員会による発掘調査が随所で行われており、縄文時代晩期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されています。

なかでも、平安時代後期から鎌倉時代中期においては、広範囲に展開する居住域や「平将胤、源親方、藤原宗興」の3名の人名を残した解文が記された曲物を井戸枠とする井戸が検出されており、荘園を中核とする当時の土地支配関係を推定するうえで貴重な史料を提供する結果となりました。

また、今回報告する太田遺跡第1次調査においても、居住域および集落内寺院の存在が想定される屋瓦が多量に出土しました。

このような調査成果を勘案して、平成13年度以降においては、新大和川より南部にあたる太田遺跡範囲については、津堂遺跡と小字名から塔ノ本廃寺として遺跡名の変更が行われています。

調査成果の速やかな公表は、調査担当機関に課せられた大きな責務ではありますが、今回の報告書の上梓が遅延したことについて、心よりお詫び申し上げます。

本書が地域の歴史を解明していく資料として、また、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様へ深謝するとともに、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々へ心から厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎 健二

例 言

1. 本書は、八尾市太田九丁目40他6筆で実施した調整池等建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太田遺跡第1次調査(OOT91-1)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。なお、平成13年度以降、調査を実施した太田遺跡の遺跡範囲のなかで大和川より南部については津堂遺跡・塔ノ本廃寺に遺跡名が変更されている。
1. 現地調査は平成4年1月28日から平成4年3月23日(実働40日)にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は約1000㎡を測る。
1. 現地調査においては荒川和哉・鈴木義人・林 成光・松田恵一・鷲家規子が参加した。
1. 整理業務は、平成19年4月から12月にかけて整理係の原田昌則・尾崎良史が実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-岩沢玲子・北原清子・山内千恵子、図面トレース-山内、遺物写真撮影-尾崎・北原、写真図版作成-尾崎が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が担当した。
1. 現地調査および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。(敬称略)
山田幸弘・上田 陸(藤井寺市教育委員会)、(株)工苑都市開発、阪和住建㈱

凡 例

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会発行の「八尾市埋蔵文化財分布図」(平成19年度版)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、磁北を示す。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版「新版 標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。
井戸-SE 土坑-SK 溝-SD 小穴・柱穴-SP
1. 遺構図面の縮尺は適宜決定し、縮尺数値を提示した。
1. 遺物図面の縮尺は1/4を基本とする。遺物実測図の断面表記については、土師器・瓦器は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石製品は斜線を用いた。
1. 土器の形式・編年で参考とした文献については、p42に提示した。

本文目次

はしがき

八尾市埋蔵文化財分布図

例言・凡例

第1章 調査に至る経過	1
第2章 地理・歴史的環境	1
第3章 調査概要	5
第1節 調査の方法と経過	5
第2節 各調査区の概要	5
第1区	5
1) 第1区 基本層序	5
2) 第1区 検出遺構・出土遺物	7
3) 第1区 第1層出土遺物	8
第2区	9
1) 第2区 基本層序	9
2) 第2区 検出遺構・出土遺物	9
第3区	11
1) 第3区 基本層序	11
2) 第3区 検出遺構・出土遺物	11
第4章 まとめ	44

挿図目次

第1図 遺跡周辺図	2
第2図 調査地周辺図	6
第3図 調査位置および地区割図	6
第4図 第1区 第1面平断面図	7
第5図 第1区 SK101出土遺物実測図	7
第6図 第1区 SK101平断面図	8
第7図 第1区 第1層出土遺物実測図	8
第8図 第2区 第1面平断面図	10
第9図 第2区 SD101出土遺物実測図	10
第10図 第3区 SB101平断面図	11
第11図 第3区 第1面検出遺構平面図	12
第12図 第3区 北壁・東壁断面図	13
第13図 第3区 SE101平断面図	14
第14図 第3区 SE101出土遺物実測図	15

第15図	第3区	S E 102断面図	15
第16図	第3区	S E 102出土遺物実測図	16
第17図	第3区	S E 103断面図	16
第18図	第3区	S E 103出土遺物実測図 - 1	17
第19図	第3区	S E 103出土遺物実測図 - 2	18
第20図	第3区	S E 104断面図	19
第21図	第3区	S E 104出土遺物実測図 - 1	20
第22図	第3区	S E 104出土遺物実測図 - 2	21
第23図	第3区	S E 104出土遺物実測図 - 3	22
第24図	第3区	S E 105断面図	23
第25図	第3区	S E 105出土遺物実測図 - 1	24
第26図	第3区	S E 105出土遺物実測図 - 2	25
第27図	第3区	S E 106、107断面図	26
第28図	第3区	S E 106出土遺物実測図	27
第29図	第3区	S E 107出土遺物実測図	27
第30図	第3区	S K 102出土遺物実測図	28
第31図	第3区	S K 105断面図	28
第32図	第3区	S K 105出土遺物実測図	29
第33図	第3区	S K 107断面図	29
第34図	第3区	S K 107出土遺物実測図	30
第35図	第3区	S K 108出土遺物実測図	30
第36図	第3区	S K 102、108、110~113断面図	32
第37図	第3区	S K 110、111、112、113出土遺物実測図	33
第38図	第3区	S D 101、103、108、109、113、114、116、117、120、122断面図	34
第39図	第3区	S D 101出土遺物実測図	35
第40図	第3区	S D 103出土遺物実測図	35
第41図	第3区	S D 108、109出土遺物実測図	36
第42図	第3区	S D 113出土遺物実測図	37
第43図	第3区	S D 114出土遺物実測図	37
第44図	第3区	S D 116出土遺物実測図	38
第45図	第3区	S D 117、120、122出土遺物実測図	38
第46図	第3区	S P 144出土遺物実測図	40
第47図	第3区	第2面検出遺構平面図	43
第48図	調査地周辺復元条里区画と小字名図		45
第49図	調査地周辺における平安時代後期から鎌倉時代中期の検出遺構平面図		46

表 目 次

第1表	津堂遺跡・塔ノ本庵寺周辺調査一覧表	3
第2表	第3区 第1面 土坑(SK)法量表	33
第3表	第3区 第1面 溝(SD)法量表	39
第4表	第3区 第1面 小穴・柱穴(SP)法量表	40

図 版 目 次

図版 一	第1区 第1面全景		図版一三	第3区 SD116、SD117検出状況	
	第2区 第1面全景			第3区 SP144検出状況	
図版 二	第3区 第1面北部遺構検出状況		図版一四	第3区 第2面北部全景	
	第3区 第1面南部遺構検出状況			第3区 第2面南部全景	
図版 三	第3区 SE101検出状況		図版一五	第1区 SK101、第1区第1層、	
	第3区 SE102検出状況			第2区 SD101出土遺物	
図版 四	第3区 SE103検出状況		図版一六	第3区 SE101、SE102出土遺物	
	同上 瓦積み井戸側検出状況		図版一七	第3区 SE102、SE103出土遺物	
	同上 瓦積み井戸側検出状況		図版一八	第3区 SE103出土遺物	
	同上 井戸側断割り状況		図版一九	第3区 SE103、SE104出土遺物	
	同上 井戸側下部曲物検出状況		図版二〇	第3区 SE104出土遺物	
図版 五	第3区 SE104検出状況		図版二一	第3区 SE104出土遺物	
	同 井戸側検出状況		図版二二	第3区 SE104出土遺物	
	同 井戸掘方		図版二三	第3区 SE105出土遺物	
	同 井戸掘方内遺物出土状況		図版二四	第3区 SE105出土遺物	
	第3区 SE105検出状況		図版二五	第3区 SE105、SE106出土遺物	
図版 六	第3区 SE106検出状況		図版二六	第3区 SE107出土遺物	
	同上 遺物出土状況		図版二七	第3区 SE107、SK102、SK105、	
図版 七	第3区 SE106断面図			SK107出土遺物	
	第3区 SE107検出状況		図版二八	第3区 SK107、SK108出土遺物	
図版 八	第3区 SK107検出状況		図版二九	第3区 SK108出土遺物	
	第3区 SK108検出状況		図版三〇	第3区 SK110、SK111、SK112、	
図版 九	第3区 SK109検出状況			SK113、SD101出土遺物	
	第3区 SK110検出状況		図版三一	第3区 SD103、SD108、SD109	
図版一〇	第3区 SK111検出状況			出土遺物	
	第3区 SK112検出状況		図版三二	第3区 SD113、SD114出土遺物	
図版一一	第3区 SK113検出状況		図版三三	第3区 SD114、SD116、SD117	
	同上 遺物出土状況			出土遺物	
図版一二	第3区 SD101検出状況		図版三四	第3区 SD120、SD122、SP144	
	第3区 SD103検出状況			出土遺物	

第1章 調査に至る経過

今回報告する太田遺跡第1次調査(OOT91-1)の発掘調査地点である大阪府八尾市太田九丁目一帯は、八尾市の南西端に位置し、南部および西部が藤井寺市津堂二～四丁目と接している。発掘調査を実施した平成4年時点においては、南部で東西方向に流れる大和川により分断される太田遺跡範囲の南端部分に位置していた。

そのような状況下、平成3年10月に申請者から、太田九丁目において調整池他を建設する旨の申請書が社会教育部文化財室(当時)に提出された。平成3年10月24・25・28日に、社会教育部文化財室により2m四方の調査区を10箇所(第1～10調査区)に設定した遺構確認調査(吉田1992)が実施された。その結果、平安時代後期から鎌倉時代を中心とする遺物を含む包含層が非常に良好な状態で広範囲に広がることが確認された。なかでも、第1調査区では梵字文軒丸瓦(吉田1992)が出土しており、申請地一帯において平安時代後期から鎌倉時代に至る集落域ならびに寺院が存在していた可能性が高くなった。このような経緯を経て発掘調査を実施するに至ったもので、三者による業務委託契約の締結後、現地調査を実施した。

調査の結果、第3区を中心として、平安時代後期から鎌倉時代中期の集落域に関連した数多くの遺構が検出された他、寺院に関連した数多くの屋瓦が出土している。これらの調査成果および、近接する藤井寺市域で行われた大阪府教育委員会・藤井寺市教育委員会による既往調査成果から、平成13年度以降については、大和川より南部にあたる太田遺跡範囲については、津堂遺跡と小字名から塔ノ本廃寺として遺跡名の変更が行われている。したがって、本文では遺跡の地理・歴史的環境については、津堂遺跡・塔ノ本廃寺を中心とした内容を記述する。

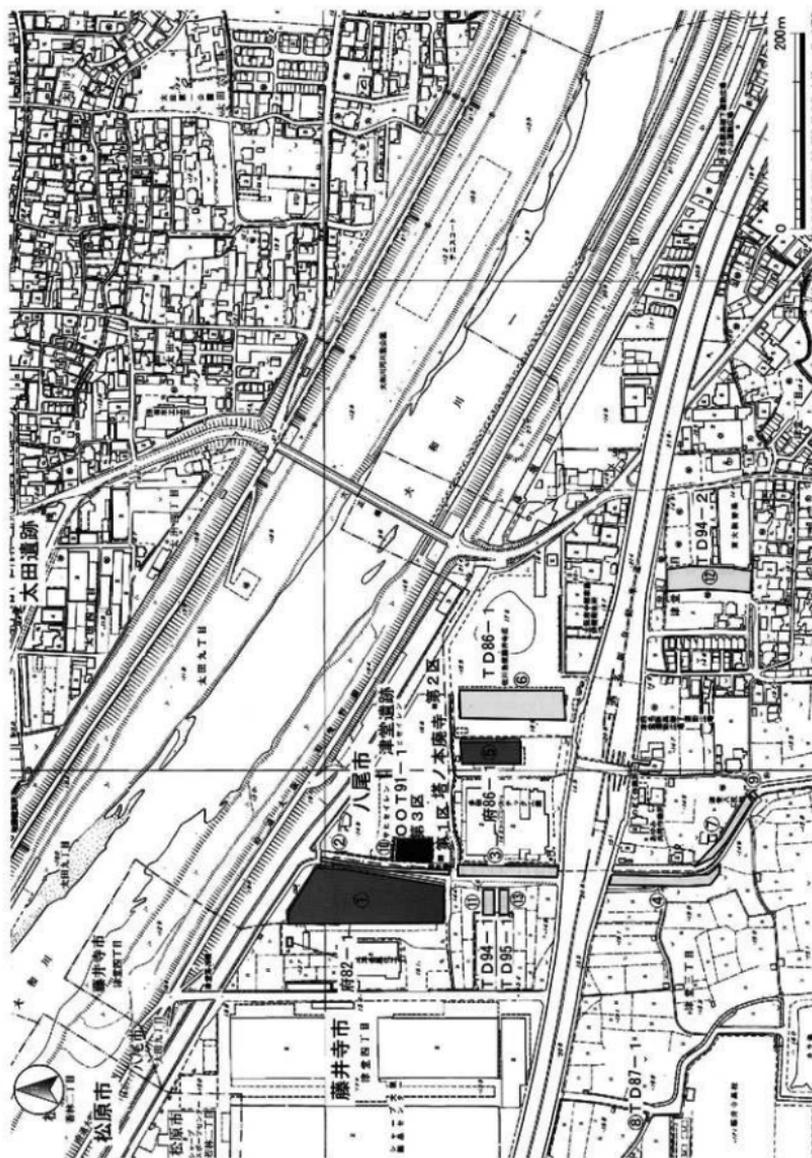
第2章 地理・歴史的環境

津堂遺跡・塔ノ本廃寺は、大阪府八尾市南西部の太田九丁目に位置する遺跡で、南部および西部は藤井寺市の津堂二～四丁目と市境を接している。地理的には、羽曳野丘陵末端部に位置するが、江戸時代中期の宝永元年(1704)に付け替えられた新大和川が遺跡の北部を横断しているため、往時の景観とは趣を異にしている。隣接する遺跡としては、北に八尾南遺跡・太田遺跡、東に大正橋遺跡、南に藤井寺市の津堂遺跡がある。

津堂遺跡は、昭和48年に藤井寺市津堂三丁目で行われた府立藤井寺高校の建築に伴う事前調査で弥生時代から平安時代に至る遺構・遺物が検出されたことから遺跡として認識されるようになった。

既往調査では、縄文時代晩期以降の遺物が出土しているが、明確な遺構が存在するのは、弥生時代後期から古墳時代初頭である。⑤調査地では、土坑を中心とする遺構が検出されている。①調査地では、古墳時代前期後半(4世紀後半)の土器溜が出土しており、南東約600mに位置する古市古墳群形成の初現期に造営された津堂城山古墳との関わりが推定される。

古墳時代中期においては、①⑤⑩調査地を範囲とする約200mに亘って5世紀代の遺構・遺物



第1図 遺跡周辺図(S=1/5000)

第1表 津堂遺跡・塔ノ本願寺周辺調査一覧表

番号	調査名 (略号)	調査地	調査機関	調査期間	面積 (㎡)	調査 要因	主な遺構・出土遺物	文献名
①	津堂 (82-1)	藤井寺津堂 4丁目・八 咫市人出9 丁目	府教委	S57/12/20~ S58/3/31	約8000	倉庫建設	河川〔4c〕(古式土師器)、溝・井戸・土坑〔5c〕(土師器、須恵器、陶式土器)、竪立柱礎物・井戸(土坑、溝・小穴〔11c後~12c前〕(土師器、東洋系須恵器、瓦器、中国産磁器、本製品、鉄製品)	阿部幸一、岩崎二郎1962「津堂遺跡」『大阪府文化財調査報告書 第43輯』大阪府教育委員会
②	津堂 (XNS-1)	藤井寺津堂 300-2地	藤教委	S58/3/8~ 3/16	60	西水川改 修	溝〔12c後〕(瓦器類)	上野末喜1985「藤井寺市文化財保護事業年報 昭和57・58・59年度」藤井寺市教育委員会
③	津堂 (XNS-E)	藤井寺津堂 4丁目・一 305地	藤教委	S58/11/1~ 12/17	592	西水川改 修	自然河川〔6c〕、竪立柱礎物〔13c〕	天野末喜1984「文化財保護事業年報V 昭和58年度」藤井寺市教育委員会
④	津堂 (XNS)	藤井寺津堂 3丁目	藤教委	S60/10/16~ 12/20	350	西水川改 修	竪柱なし	上田隆1988「文化財保護事業年報VI 昭和60年度」藤井寺市教育委員会
⑤	津堂 (86-1)	藤井寺津堂 2丁目73地	府教委	S61/4/15~ 11/5	4807	倉庫建設	井戸・土坑・溝(市内~5c中)(古式土師器、須恵器、製埴土器、石製品、瓦器)、竪立柱礎物・井戸・土坑・溝・竪列・土器規矩ノド、土溝蓋〔12c米~13c初〕(土師器、東洋系須恵器、瓦器、磁瓦、中国産磁器、鉄瓦、本製品)	一瀬和夫他1987「大阪府藤井寺市市営遺跡-86-1区の開拓-」大阪府教育委員会
⑥	津堂 (TD86-1)	藤井寺津堂 1丁目	藤教委	—	—	—	—	—
⑦	津堂 (TD86-4)	藤井寺津堂 2丁目	藤教委	S62/3/16~ 3/30	350	西水川改 修	区画溝〔12~13c〕	上田隆1987「文化財保護事業年報VII 昭和61年度」藤井寺市教育委員会
⑧	津堂 (TD87-1)	藤井寺津堂 3丁目	藤教委	S62/4/13~ 4/17	5	溝等大溝 改修	竪柱なし	上田隆1988「文化財保護事業年報IX 昭和62年度」藤井寺市教育委員会
⑨	津堂 (TD87-2)	藤井寺津堂 3丁目	藤教委	S62/5/11~ 5/19	30	西水川改 修	竪柱なし	上田隆1988「文化財保護事業年報IX 昭和62年度」藤井寺市教育委員会
⑩	太田 (O.O.T91-1)	八咫市太田 9丁目・40 地	八咫研	H4/1/28~ 3/23	1000	台場建設	井戸・土坑・溝・小穴〔12~13c〕(土師器、東洋系須恵器、中国産磁器、瓦)	本報掲載
⑪	津堂 (TD94-1)	藤井寺津堂 4丁目・一 319-2	藤教委	H6/9/27~ 10/6	52915	宅地造成	溝(中世)(瓦器類)	新野啓夫1985「『津堂遺跡の調査』『石川流域連続調査調査報告書』藤井寺市文化財報告書X1」藤井寺市文化財調査委員会
⑫	津堂 (TD94-2)	藤井寺津堂 2丁目 300-1地	藤教委	H6/10/21~ 10/24・11/10 ~11/29	417	分譲住宅	溝・不明遺構(瓦器) 陶瓦土器、須恵土器、土師器、須恵器、中国産磁器、石磨)	上田隆1986「第2号 津堂遺跡の調査 2」『石川流域連続調査調査報告書』藤井寺市文化財報告書X1」藤井寺市文化財調査委員会
⑬	津堂 (TD95-1)	藤井寺津堂 4丁目 319地	藤教委	H7/4/28	2	倉庫建設	溝(中世)(土師器類)	伊々木潤1986「第2号 津堂遺跡の調査 1」『石川流域連続調査調査報告書』藤井寺市文化財報告書X1」藤井寺市文化財調査委員会

凡例 府教委=大阪府教育委員会 藤教委=藤井寺市教育委員会 八咫研=(財)八咫市文化財調査研究会

が検出されている。①調査地では5世紀前半を中心とする河川跡が検出されている。⑤調査地では、井戸、土坑(大土坑)、溝、小穴、不明遺構が密集する居住域が検出されている。遺物としては、土師器、須恵器、製塩土器、馬歯の他、祭祀的な様相を持つ滑石製勾玉・有孔円板・紡錘車・刀子形模造品等の石製模造品が多く出土している。時期的には、田辺編年のTK208型式(5世紀中葉)前後の集落と推定される。

古墳時代中期以降の遺構としては、③調査地で古墳時代後期の自然河川、⑫調査地で飛鳥時代の溝等が確認されている程度である。

平安時代後期の津堂遺跡・塔ノ本廃寺が位置する一帯は「和名類聚抄」によれば、河内国丹北郡の東端から志紀郡の西端に位置していた。

平安時代後期(11世紀後半)には、①調査地を中心に一町四方の区画内に掘立柱建物群を配した集落が出現しており、その後13世紀中葉に至るまで継続して東方の⑩③⑤⑥調査地において集落域の拡大が計られている。①調査地の第18トレンチで検出されたSE01の井戸側に使用されていた曲物の上から8段目には、「康和四年四月廿三日守丸」、上から4～6段目には「詮解中雑物進上名簿帳事合佰柒拾玖人平将胤頼百正源親方鞍二百正藤原宗興縁三百正」の同内容の解文が書かれていた。両者の筆跡が異なるため、進上の内容と康和四年(1102)との整合の確認は無いが、井戸の構築時期や荘園を中核とする土地支配関係を推定する上で貴重な資料と言えよう。この時期の中で最も集落域が拡大するのは12世紀後半から13世紀前半にあったようで、⑩③⑤⑥調査地では条里区画の方位に沿った集村化が認められる。⑤調査地では「コ」の字状に廻る溝に画された内側に掘立柱建物群を配する方形区画の屋敷地が13世紀前半には成立しているほか、屋敷地の北方には屋敷墓を構成する土葬墓が1基検出されている。塔ノ本廃寺に関連するものとしては、市教委による遺構確認調査の第1調査区および本調査地第1・3区から出土した瓦類がある。本調査地の第1・3区を含む小字「塔ノ本」を中心に屋瓦類が出土している。平安時代後期(12世紀)の梵字曼陀羅文軒丸瓦と梵字唐草文軒平瓦との組み合わせが創建瓦と推定され、屋瓦類の出土位置から勘案して寺域位置としては、本調査地の第1区付近が想定される。ただ、第3区では廃瓦を井戸側に使用した鎌倉時代中期(13世紀中葉)のSE103が認められるため、この時期以前には廃絶していたことが推定される。周辺調査においては、この井戸の構築を最後に居住域としては利用されておらず、集落域の移動があったものと推定される。鎌倉時代中期以降は、明瞭な居住域が検出されておらず、以後、水田を中心とした生産域として利用されていたようである。

参考文献(周辺の既往調査文献については第1表に示した)

- ・中井 均 1991「中世の居館・寺そして村落—西国を中心として—」『中世の城と考古学』(朝新人物往来社)
- ・近藤康司 1991「摂河泉の古代寺院(三)和泉国大鳥郡塩穴郷 塩穴寺」『摂河泉会報 第16号』摂河泉地域史研究会
- ・吉田野乃 1992「22. 太田遺跡(91-185)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・吉田野々 1992「太田遺跡出土の胎藏界中台八葉院梵字曼陀羅文軒丸瓦について」『摂河泉会報 第18号』摂河泉地域史研究会

第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は調整池等の建設事に伴うもので、当調査研究会が太田遺跡内で行った第1次調査(OOT91-1)にあたる。調査対象部分は、調整池等の建設予定地の3箇所である。調査区が分散しているため、西部に設定した二箇所の調査区のうち南部を第1区(約21m)、北部を第3区(約950m)、東部に設定した調査区を第2区(約25m)と呼称した。調査区の総面積は約1000m²を測る。

調査地では、調査地の北西隅に任意の基準点(X0・Y0)を設け、そこから東に175m、南に60mの範囲で地区割を実施した。地区割は5m四方を一単位として、東西方向にはアルファベット(a~z、A~I)、南北方向は算用数字(1~12)とし、地区名の表記としては、1a~12I地区と呼称した。地点の表記は、調査区北西隅のX0・Y0を基点として、X軸がX0~X60、Y軸がY0~Y175を設けX・Y交点の数値を地点名とした。

調査では、第1区で現地地表下1.5m、第2区で1.8~1.9m、第3区で1.4~1.6mの機械掘削を行い、以下0.3m前後については人力による調査を行った。

調査の結果、平安時代後期から鎌倉時代中期に至る遺構・遺物を検出した。出土遺物は、古墳時代中期から鎌倉時代中期に比定される土師器、瓦器、石製品、屋瓦が出土しており、総数はコンテナ箱(40×60×20cm) 30箱に及ぶ。

第2節 各調査区の概要

第1区(第4図、図版一・一五)

11a・b地区に設定した調査区で東西幅4.0m、南北幅5.3m、面積約21m²を測る。2面(第1・2面)にわたる調査を実施した。第1面は現地地表下約1.6mに存在する第2層上面(T.P.+14.5m前後)を対象としたもので、平安時代後期から鎌倉時代に比定される土坑1基(SK101)を検出した。第2面は第1面から0.1~0.2m下部の第3層(T.P.+14.4m前後)で検出したもので、出土遺物から古墳時代中期の面が想定されるが、遺構は検出されていない。その他、第1層からは平安時代後期(12世紀代)の梵字文軒丸瓦2点(3・4)と蓮華文軒平瓦1点(5)が出土している。

1) 第1区 基本層序(第4図)

第0層：盛土。層厚120cmを測る。上面の標高はT.P.+16.10m前後である。

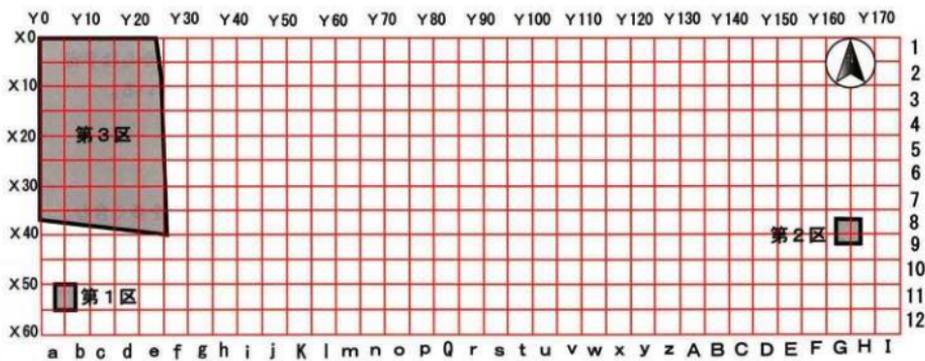
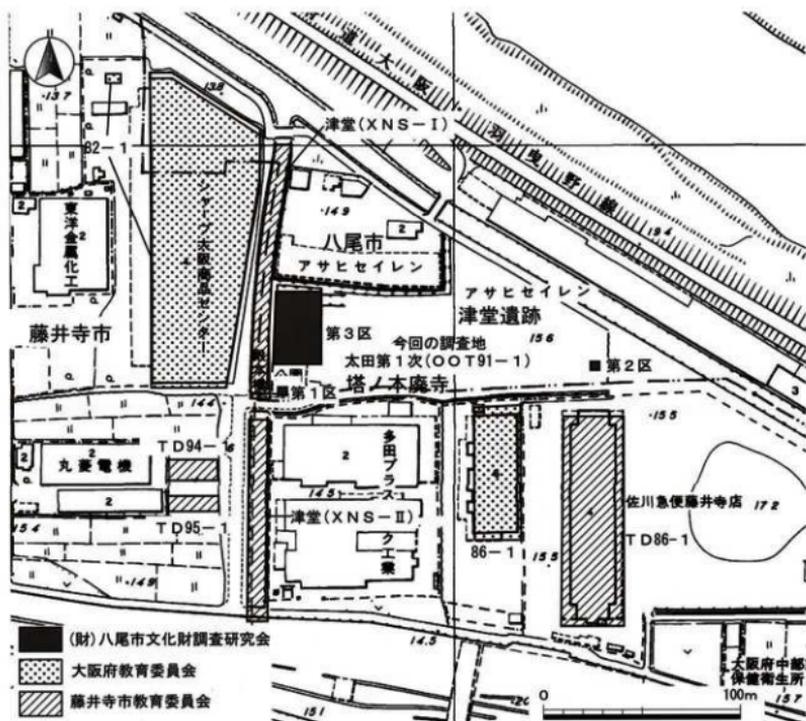
第0'層：N2/0黒色細砂混粘土。層厚15cmを測る。

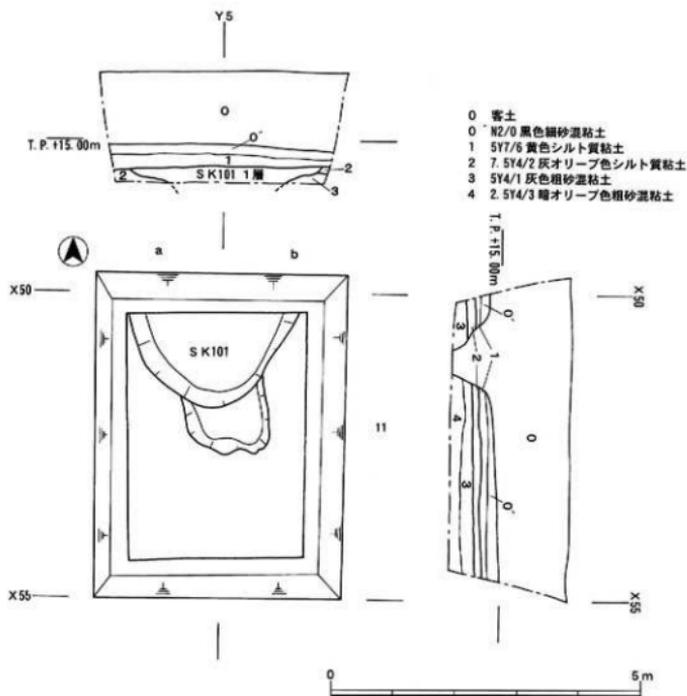
第1層：5Y7/6黄色シルト質粘土。層厚5~25cmを測る。平安時代後期以降の遺物を多く含む。

第2層：7.5Y4/2灰オリブ色シルト質粘土。層厚10~17cmを測る。上面が第1面。

第3層：5Y4/1灰色粗砂混粘土。層厚13~18cm。上面が第2面。

第4層：2.5Y4/3暗オリブ色粗砂混粘土。層厚15cm以上。





第4図 第1区 第1面平断面図(S=1/80)

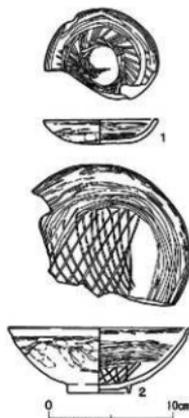
2) 第1区 検出遺構・出土遺物

・第1面

土坑(SK)

SK101(第4～6図、図版一・一五)

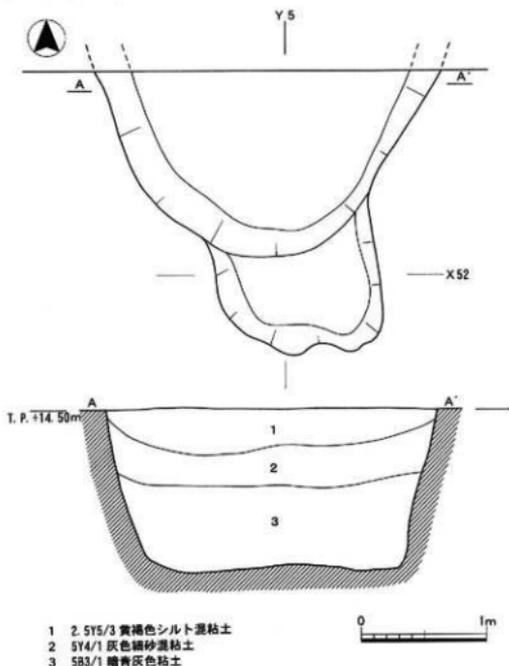
調査区の北部の11 a・b地区で検出した。南端部分に張り出し部分を持つもので、北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.77m、南北幅2.34m、深さ1.30mを測る。埋土は粘土を主体とする3層(1～3層)が堆積している。遺物は1層から平安時代後期を中心とする土師器、須恵器、瓦器、屋瓦等の細片が少量出土している。2点(1・2)を図化した。1は瓦器小皿である。約1/2が残存している。口径9.0cm、器高2.0cmを測る。見込みのヘラミガキは直線文を放射状に廻らした後、短い直線で円形状に描くもので類例が少ない文様構成である。2は和泉型瓦器椀である。尾上編年のⅡ-3期に比定される。遺構の帰属時期は平安時代後期(12世紀後半)である。



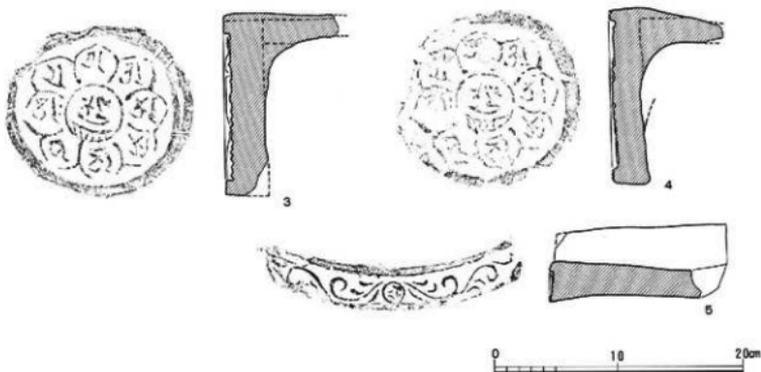
第5図 第1区 SK101
出土遺物実測図

3) 第1区 第1層出土遺物(第7図、図版一五)

第1層からは土師器、瓦器碗、屋瓦等が極少量出土している。屋瓦3点(3~5)を図化した。3・4は梵字文軒丸瓦である。3・4ともに蓮華文八弁に胎藏界曼陀羅の中台八葉院と呼ばれる仏を梵字で表した梵字曼陀羅文軒丸瓦である。径4.7cmを測る圏線で区画された中房内に大日如来を表す(アーク)梵字が連弁を示す文様の上に記されている。周辺の八弁には上から時計回りに宝輪如来(ア)、普賢菩薩(アン)、開敷華王如来(アー)、文殊菩薩(ア)、無量寿如来(アン)、観世音菩薩(ボ)、天鼓雷音如来(アク)、弥勒菩薩(ユ)の梵字が表現されている。3は瓦当面がほぼ完存しており、直径14.5cmを測る。周縁はやや低く周縁幅は不揃いで0.6~1.3cmを測る。瓦当面周縁の調整はナゲが行われており、上面では丸瓦に向けて指ナゲ、下面では瓦当面に沿っ



第6図 第1区 SK101断面図(S=1/40)



第7図 第1区 第1層出土遺物実測図

てナデが行われているが全体に雑で、特に下端面には凹凸面が目立つ。丸瓦との接合については、瓦当裏面に丸瓦の形状に沿った窪みを設け、その部分に丸瓦を挿入するもので、上端部分に0.5cm程度の補足粘土が足されている他、内面の接合部分には補足粘土を用い接合を強固にしている。色調は赤橙色。焼成は良好である。4も3と同范の梵字曼陀羅文軒丸瓦である。瓦当文様は丸瓦の設置位置に対してやや時計回りにずれている。瓦当面はやや歪で直径14~15cmを測る。周縁はやや低く幅0.7~1.2cmを測る。瓦当周縁部の調整はナデが行われているが、全体に雑である。丸瓦との接合については3と同様である。色調・胎土・焼成は3と同じである。3・4共に平安時代後期(12世紀代)に比定される。類例としては、当麻寺曼陀羅堂(奈良県香芝市)、塩穴寺(大阪府堺市)から同意匠のものが出土している。なお、梵字文軒丸瓦については、第1区出土の3・4の他、遺構確認調査の第1調査区出土の1点(吉田1992)および第3区のSK107(135)を含めて4点が出土している。5はキリークの梵字を中心飾りに持つ梵字唐草文軒平瓦である。やや小ぶりで上弦幅21.1cm、下弦幅20.2cm、幅3.2cmを測る。外縁は全体に幅狭でやや上外縁幅が広い。顎は直線顎である。平瓦部との接合部には凹面では瓦当面から5.5cm、凸面では4.0cm程度にヘラケズリの痕跡を残す。平瓦の凹面には糸切り痕と細い布目痕、凸面には長辺に沿ってヘラケズリが行われている。色調は灰色。焼成は良好である。3・4の梵字曼陀羅文軒丸瓦との組み合わせが想定される。市本芳三氏分類(市本2001)の軒平瓦梵字唐草文のJ-6(12世紀代)にあたるもので、日置荘遺跡(堺市)、岡2丁目遺跡(松原市)、はさみ山遺跡(藤井寺市)から同范瓦が出土している。

第2区(第8図、図版一)

8・9GH地区に設定した調査区で規模は東西5m、南北5m、面積25㎡を測る。現地表下約2.2mに存在する第2層上面(T.P.+14.9m)で平安時代後期の土坑1基(SK101)と溝3条(SD101~103)を検出した。

1)第2区 基本層序(第8図)

第0層:盛土。層厚200cm。

第0層: N2/0黒色細砂混粘土。層厚15cm前後。

第1層: 5Y7/6黄色シルト。層厚5cm。

第2層: 7.5Y4/2灰オリーブ色粘土。層厚35cm以上。上面が第1面。

2)第2区 検出遺構・出土遺物

土坑(SK)

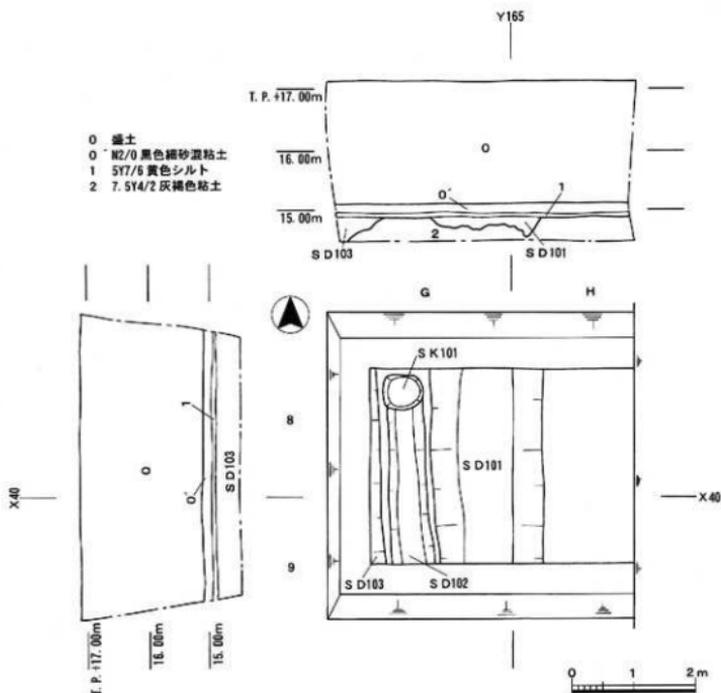
SK101(第8図、図版一)

8G地区で検出した。SD102の北端を切っている。円形を呈するもので東西径0.7m、南北径0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は7.5YR2/1黒色シルト混粘土である。遺物は平安時代後期の土師器、瓦器の細片が極少量出土したが、図化し得たものはない。

溝(SD)

SD101(第8・9図、図版一・一五)

調査区のはほぼ中央部で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長3.2m、幅1.8m、深さ0.34mを測る。埋土は10YR6/1褐灰色シルト混粘質土である。出土遺物は平安時代後期の土師器、須恵器、瓦器の細片が少量出土している。2点(6・7)を図化した。6は瓦器小皿である。口径9



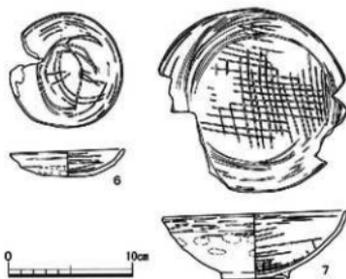
cm、器高2cmを測る。7は和泉型瓦器椀である。口径14.7cm、器高5.3cm、高台径5cm、高台高0.7cmを測る。椀形で深い体部に貼り付け高台が垂直方向に付く。体部内外面のヘラミガキは共に水平方向で、内面がやや密、外面は上部のみにやや粗く施されている。見込みには単位の細かい格子状ヘラミガキが施されている。尾上編年のⅡ-3期(12世紀中葉)に比定される。

S D102(第8図、図版一)

S D101の西に並行して伸びるもので、北端がS K101に切られている。検出長2.5m、幅0.55~0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は淡褐色シルト混粘質土である。遺物は出土していない。

S D103(第8図、図版一)

調査区の西端で検出した。西部は調査区外に至る。検出長3.2m、幅0.1~0.25m、深さ0.4mを測る。埋土は10YR6/1淡褐色シルト混粘質土である。遺物は出土していない。



第3区(第11~47図、図版二~一四・一六~三四)

調査地の北西端に設定した調査区である。東西25m、南北38m、面積950㎡を測る。2面(第1・2面)にわたる調査を実施した。第1面は現地地表下1.5~1.8mに存在する第2 a層上面(T.P. + 14.8~15.1m)を対象としたもので、平安時代後期から鎌倉時代中期に比定される掘立柱建物1棟(SB101)、井戸7基(SE101~107)、土坑21基(SK101~121)、溝26条(SD101~126)、小穴・柱穴87個(SP101~187)を検出した。第2面は第1面から0.1~0.2m下部の第3層上面(T.P. + 14.4~14.9m)で古墳時代中期に比定される土坑1基(SK201)、小穴3個(SP201~203)を検出した。

1) 第3区 基本層序(第12図)

第0層：盛土。層厚162cm。

第0'層：N2/0黒色細砂混粘土。層厚19cm。

第1層：5Y7/6黄色シルト質粘土。層厚9cm。

第2 a層：7.5Y4/2灰オリーブ色粘土。一部細砂を含む部分がある。層厚20cm。上面が第1面。

第2 b層：5Y4/4暗オリーブ色細砂混粘土。層厚13cm。整地層。

第2 c層：5Y5/3灰オリーブ色粘土。層厚17cm。整地層。

第3層：5Y4/1灰色粗砂混粘土。層厚25cm。上面が第2面。

第4層：2.5Y4/3暗オリーブ色粗砂混粘土。層厚11cm。

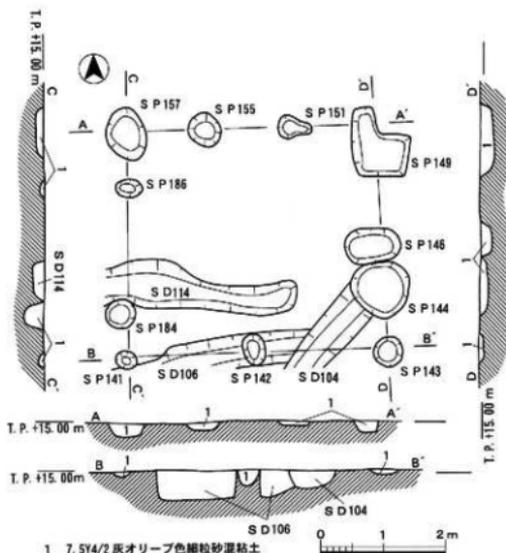
2) 第3区 検出遺構・出土遺物

・第1面

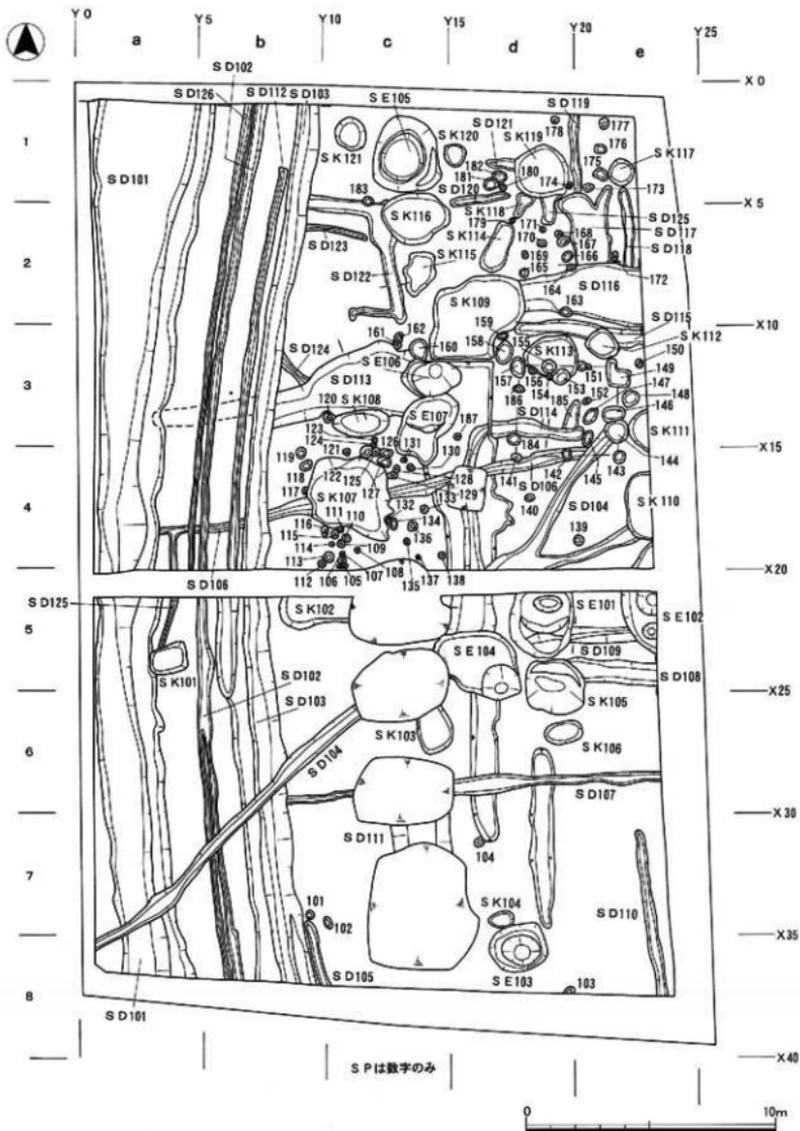
掘立柱建物(SB)

SB101(第10図)

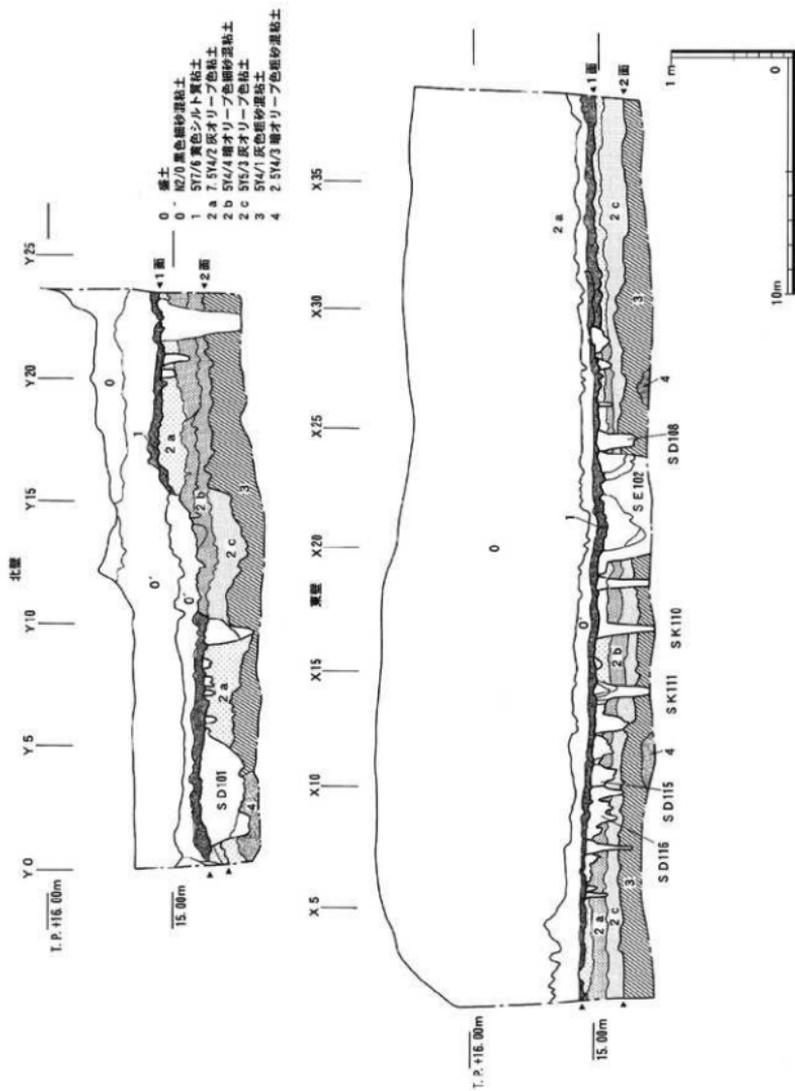
調査区北東部の3・4 d e 地区で検出した。SP141・142・143・146・149・151・155・157で構成されているが、他の多くの小穴が密集しているため関連が不明瞭である。規模は東西2~3間(4.0~4.3m)×南北2間(3.6m)の規模を測る。床面積約15㎡を測る。主軸方向は磁北方向である。SP155が12世紀後半に比定されるSK113を切るため構築時期は12世紀後半が推定される。北に近接し東西方向に伸びるSD116が13世紀前半に比定されるため、SD116が建物の北を区画した溝の可能性がある。



第10図 第3区 SB101平面断面図(S=1/80)



第11図 第3区 第1面検出遺構平面図(S=1/200)



第12図 第3区 北壁、東壁断面図(S = 水平1/200、垂直1/40)

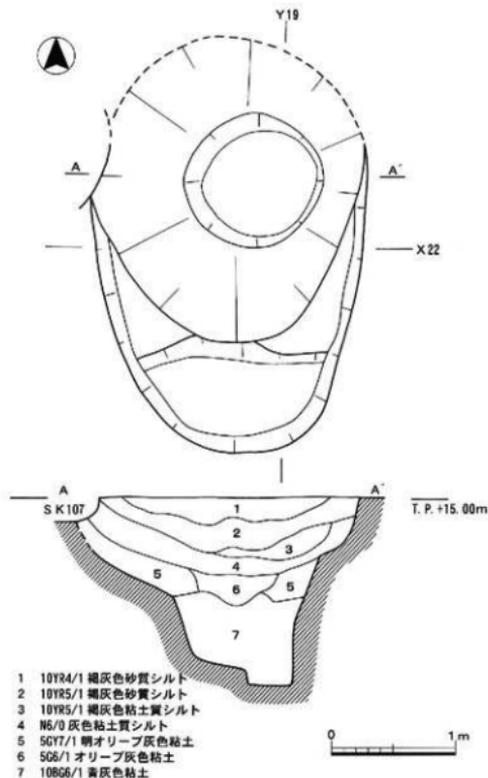
井戸(SE)

総数で7基(SE101~107)を検出した。分散した分布状況を呈しており、北部の1c地区でSE105、中央部3cd地区でSE106・107、中央部東部の5de地区を中心にSE101・102・104、南端部の7・8d地区でSE103がある。井戸の型式では、素掘り井戸が1基(SE107)、曲物積上げ井戸2基(SE104・106)、曲物+羽釜積上げ井戸が1基(SE105)、曲物+瓦積上げ井戸1基(SE103)、井戸側が不明なもの2基(SE101・102)である。時期的には平安時代後期から鎌倉時代中期(12世紀後半から13世紀中葉)に比定される。

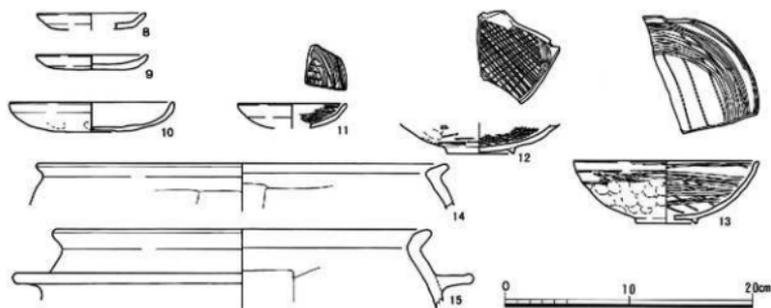
SE101(第13・14図、図版三・一六)

5d地区で検出した井戸である。SD109を切りSK107に切られている。掘方は南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西径2.21m、南北径3.40m、深さ1.53mを測る。掘方は二段で、南部にテラス状の部分がある。井戸側は掘方の北部に設置されていたと推定されるが、井戸側が抜き取られており不明である。埋土は7層(1~7層)から成るもので、堆積状況からみて、井戸廃絶時に井戸側が抜き取られた後は漸移的に堆積したことが推定される。

遺物は平安時代末期に比定される土師器、瓦器、屋瓦等の細片が少量出土している。8点(8~15)を図化した。8・9は土師器小皿である。共に水平な底部から斜上方に口縁部が伸びる。10は土師器中皿。11は瓦器小皿の細片である。見込みに平行線状ヘラミガキが施されている。12・13は和泉型の瓦器椀である。見込みには、12に単位の細かい格子状、13に平行線状ヘラミガキが行われている。13は体部外面の上位に横方向のヘラミガキが施されている。尾上編年のⅢ-1期に比定される。14・15は土師器羽釜の細片である。15は森島編年のA型式に比定される。出土遺物の大半が井戸廃絶後のものである。以上から勘案して井戸の帰属時期は平安時代末期(12世紀末)以前が推定される。



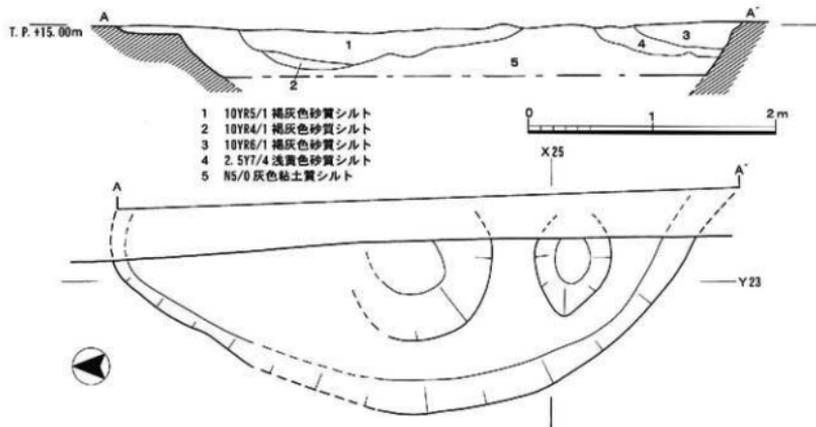
第13図 第3区 SE101断面面図(S=1/40)



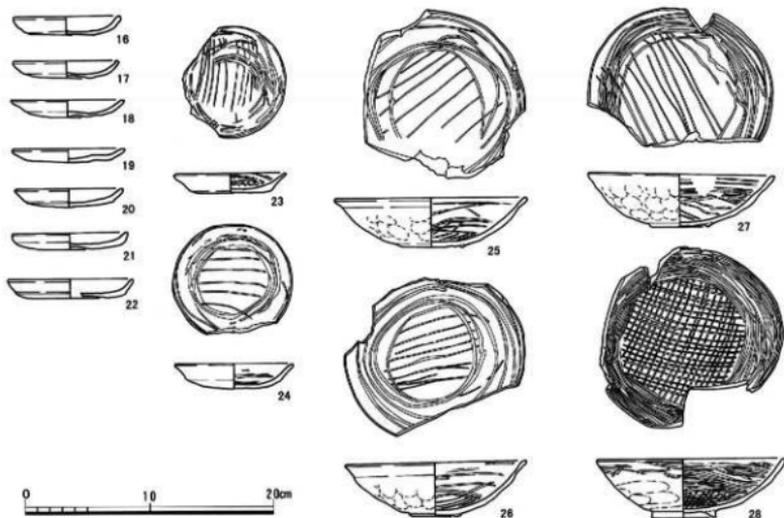
第14図 第3区 SE101出土遺物実測図

SE102(第15・16図、図版三・一六・一七)

調査区中央部東端の4・5e地区で検出した井戸である。一部を検出したのみで、大半が調査区外に至るため井戸側は検出されていない。検出部分で東西幅1.3m、南北幅4.68m、深さ0.4m以上を測る。埋土は検出部分で5層を確認した。出土遺物は平安時代末期から鎌倉時代初頭に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦、石製品の細片が多数出土している。13点(16~28)を図化した。16~22は土師器小皿である。23・24は瓦器小皿である。2点ともに見込みに平行線状ヘラミガキが行われている。瓦器碗は4点(25~28)を図化した。4点ともに和泉型瓦器碗である。28を除くものについては、形骸化した貼り付け高台を持ち、体部外面のヘラミガキが無く、見込み部分に平行線状ヘラミガキが行われている。28については、他の瓦器碗に比して高台の形状や体部外面のヘラミガキの存在、見込み部の格子状ヘラミガキを行う等の特徴をもつもので、25~27より古い要素を備えている。28が尾上編年のⅢ-1期、25~27が尾上編年のⅢ-2期にあたる。



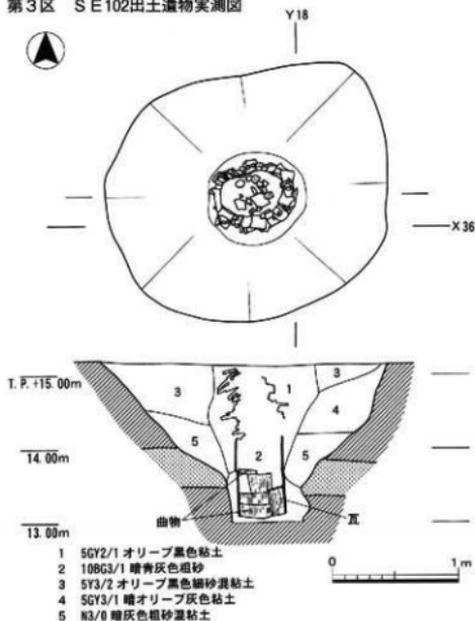
第15図 第3区 SE102平断面図(S=1/40)



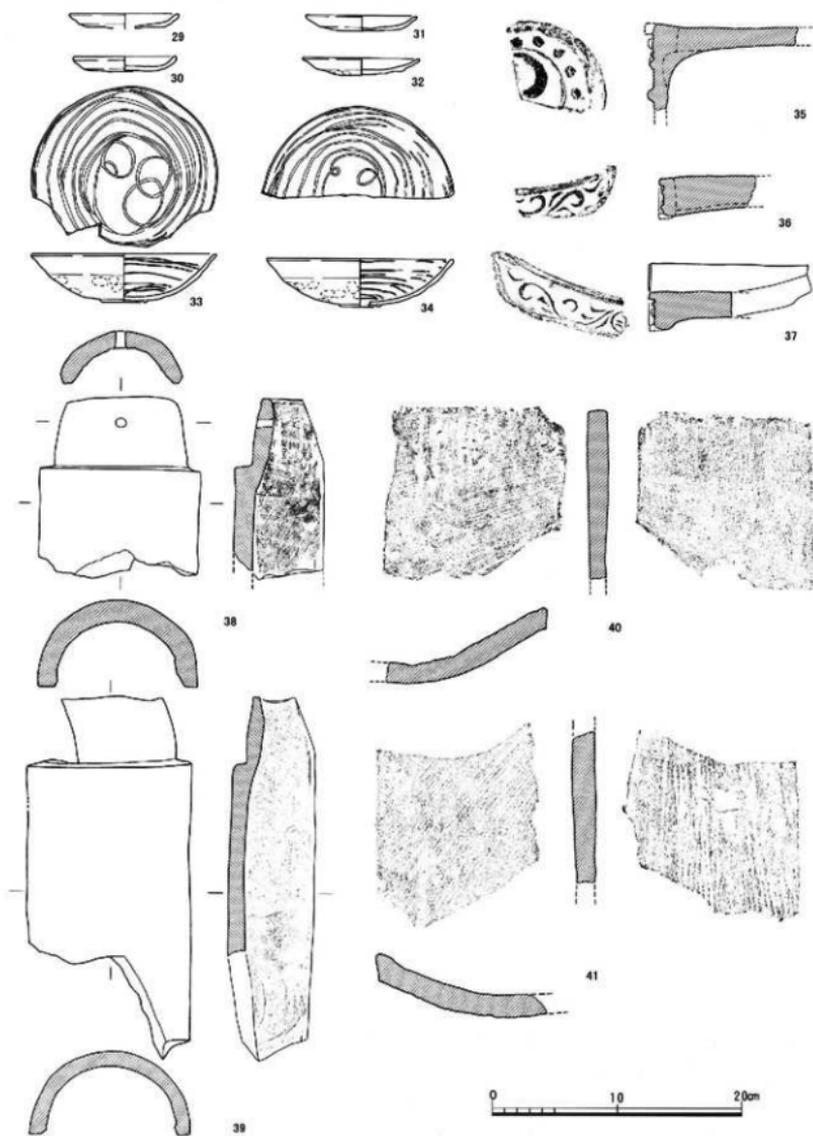
第16図 第3区 SE102出土遺物実測図

SE103 (第17~19図、図版四・一七~一九)

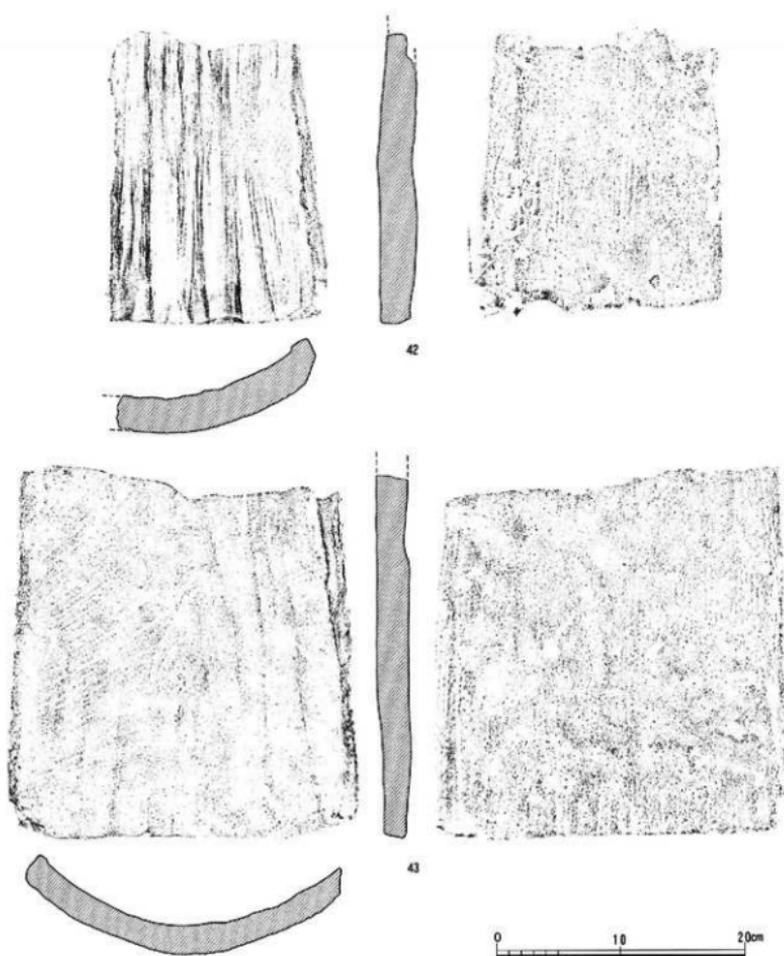
調査区南部の7・8d地区で検出した。曲物と屋瓦を井戸側に用いた井戸である。掘方の平面形状は不整形円形を呈し、東西幅2.27m、南北幅2.0m、深さ1.27mを測る。井戸側は摺鉢状を呈する掘方の中央部に設けられており、1段目ならびに2段目が曲物で、上部には細片化した屋瓦の側面側を内側に向く形で60cm前後が積み重ねられており、最上部で径0.5m前後を測る。なお、1段面の曲物井戸側の外側には、井戸側の補強を目的として、完形品に近い平瓦が縦方向に設置されている。埋土は掘方内が1・3~5層、井戸側内が2層である。遺物は鎌倉時代前期に比定される土師器、須恵器、瓦器



第17図 第3区 SE103平面図(S=1/40)



第18图 第3区 SE103出土遗物实测图-1



第19図 第3区 SE103出土遺物実測図-2

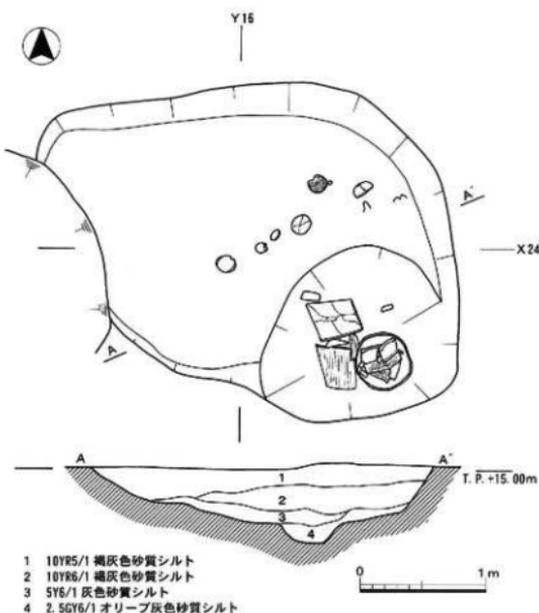
の他、井戸側の上部に使用された屋瓦が多量出土している。15点(29~43)を図化した。29~32は土師器小皿である。33・34は和泉型瓦器碗である。共に扁平な体部に形骸化した高台が付くもので、見込みに連結輪状ヘラミガキが施されている。尾上編年Ⅲ-3期に比定される。35~43は屋瓦である。35は左巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦当面の約1/4が残存している。巴はやや細く、尾は幅を減じて約半周するものと思われる。珠文は中粒で隆起がやや低い。外縁は幅狭でやや低

い。色調は黒灰色。焼成は良好。胎土中に2mm以下の長石粒が散見される。36・37が軒平瓦である。36は瓦当面对して右側約半分程度が残る。残存部で幅3.1cmを測る。内区の唐草文は鮮明で隆起が高い。外区外縁は幅狭で高い位置にある。頸は直線頸である。焼成は良好で色調は淡灰色を呈する。37は瓦当面对して左側半分が残る。5と同範の梵字唐草文軒平瓦である。色調は淡灰黒色。38・39は玉縁付き丸瓦。38は玉縁に径0.7cmを測る釘穴が穿たれている。38・39共に凸面が縄叩き後ナデ、凹面には細かい布目痕が残る。40～43は平瓦である。全て凹面には糸切り痕と布目を持つが、42・43については製作台の痕跡が残る。凸面には縦位に縄叩き目と離れ砂が付着している。33・34の瓦器碗から帰属時期は13世紀前半から中葉が推定される。

SE104(第20～23図、図版五・一九～二二)

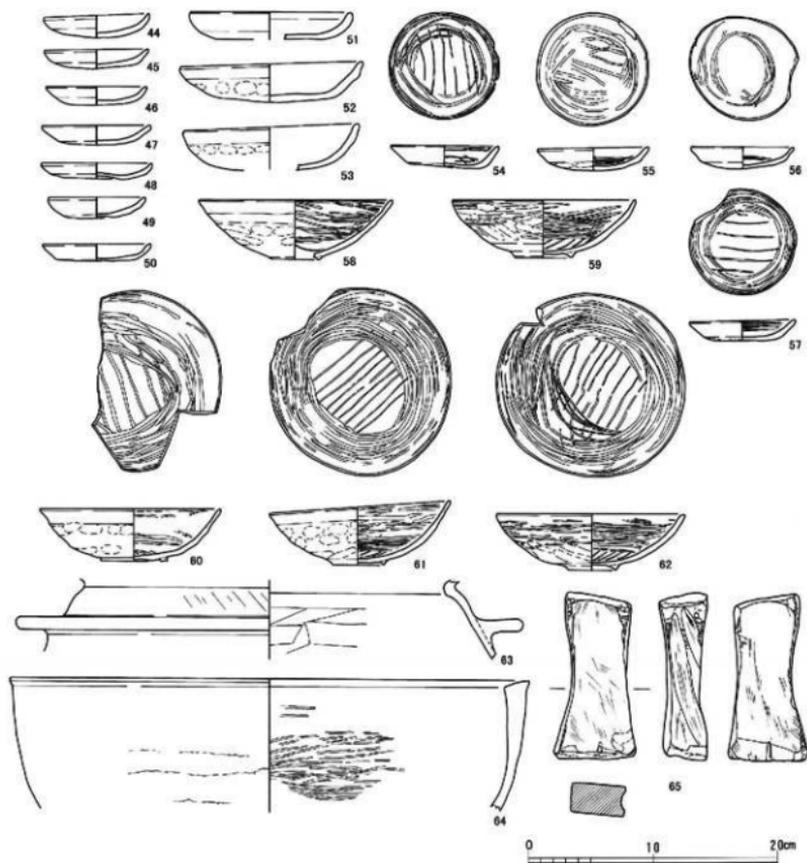
5・6cd地区で検出した。

西側がSE101・SK105に隣接し、南西部は擾乱により削平を受けている。不定形を呈するもので、東西幅2.83m、南北幅2.75mを測る。二段掘方の南東隅で不正円形を呈する掘方内に曲物井戸側が設けられている。この部分の法量は、東西径1.57m、南北径1.40m、深さ0.83mを測る。曲物井戸側は、最下段の1段のみが残存しており、径44cm、高さ20cmを測る。埋土は掘方部分で4層からなるが、井戸側部分については断面図を作成しておらず埋土が不明である。遺物は曲物井戸側内から平瓦、木製品、掘方内から平安時代末期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦、石製品等が多数出土している。



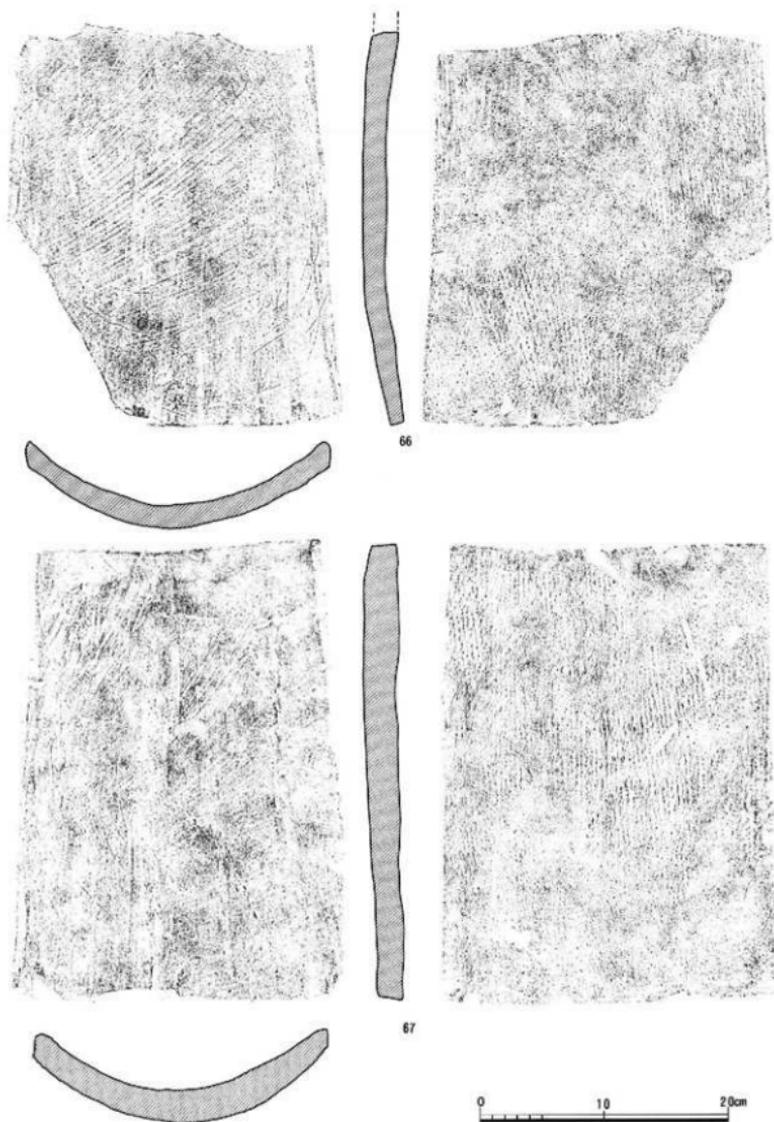
第20図 第3区 SE104断面図(S=1/40)

26点(44～69)を図化した。掲載した遺物の出土位置は、掘方内および二段掘方の上部からの出土遺物である。44～50は土師器小皿である。51～53は土師器中皿である。54～57は瓦器小皿である。見込みのヘラミガキは54・55・57が平行線、56が渦巻状である。瓦器碗は58～62の5点を図化した。形骸化した貼り付け高台を有するもので、全て見込みに平行線状ヘラミガキを行うが、体部外面にはヘラミガキを行う58・62とヘラミガキを行わない58・60・61がある。前者が尾上編年のⅡ-3期、後者がⅢ-1期にあたる。63は土師器羽釜片である。森島編年のA型式にあたる。

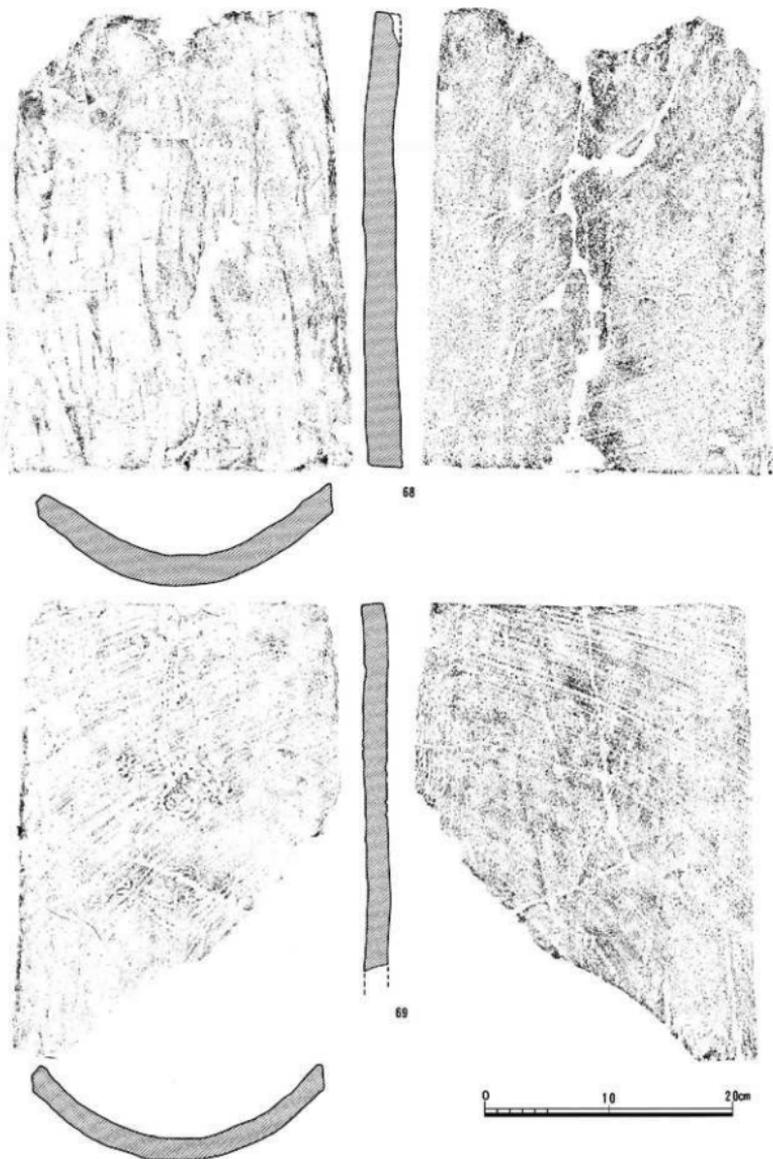


第21図 第3区 SE104出土遺物実測図-1

る。64は瓦質土器盤の細片である。復元口径42.0cmを測る。65は砥石である。使用面は4面で、その1面については2箇所断面が「U」字形に窪む筋砥石となっている。石材は流紋岩である。瓦は平瓦4点(66~69)を図化した。66は広端部に向って外反気味に反っている。広端部から約1.5cmに補足粘土が貼り付けられた痕跡を残す。凹面には糸切り痕、製作台の痕跡、布目痕が残る。凸面には縦位の縄叩きと離れ砂が残る。焼成は良好。色調は淡灰色~黒灰色。67は完形品である。全長37.2cm、狭端幅21.5cm、広端幅25.2cm、狭端高7.0cm、広端高7.4cm、厚さ2.8cmを測る。凹面は糸切り痕と布目痕が残り、狭端面から2.4cmにヘラケズリが行われている。凸面は縦位の縄叩きと離れ砂。焼成は淡赤褐色~黒灰色。焼成は良好。68は狭端面の一部を欠く以外は完存している。全長37.6cm、狭端幅23.0cm、広端幅26.4cm、狭端高7.8cm、広端高9.2cm、厚さ2.5cmを測る。

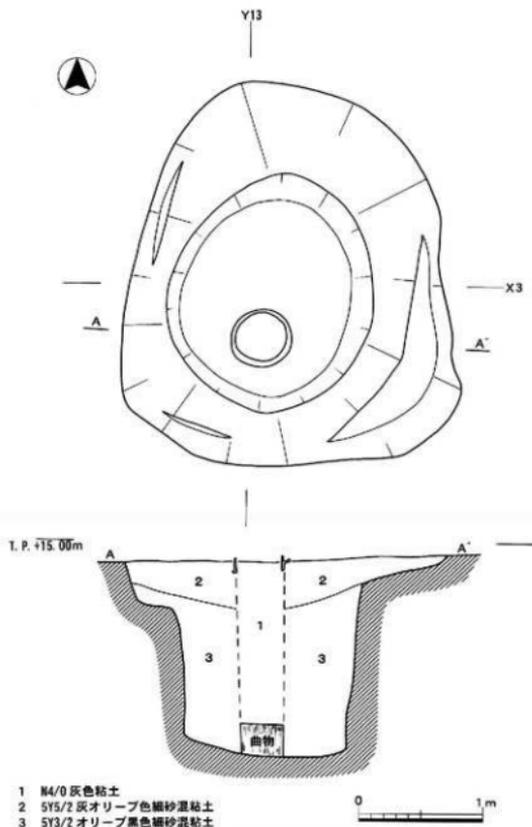


第22図 第3区 SE104出土遺物実測図-2



第23圖 第3区 SE104出土遺物実測図-3

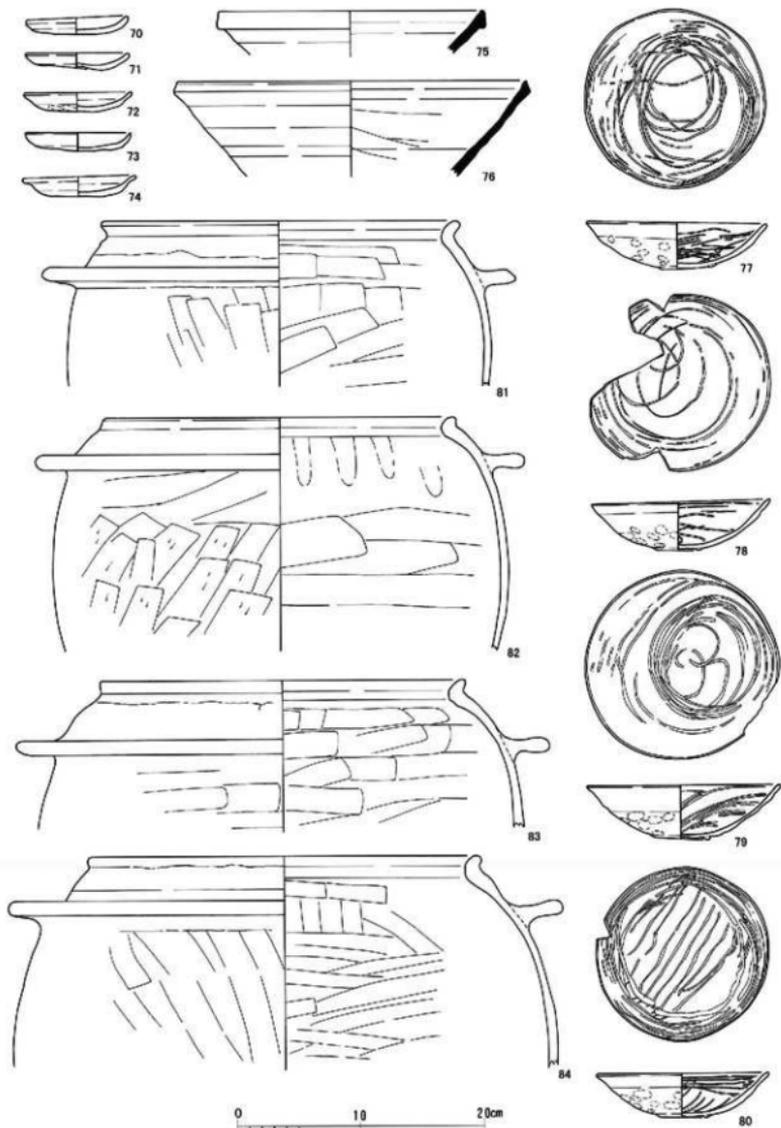
凹面に板ないしは指ナアが縦位に通る。全面に煤が付着しており、一時期に火熱を受けたことが推定される。凸面は縦位に縄叩きと離れ砂が付着。色調は黒灰色。焼成は良好。69は広端部の大半を欠く。凹面には糸切りと布目痕の他、中央部に2名の人物が頭位を相対する形で描かれている。瓦工人による戯画と推定され、全体に表現が雑で幼稚である。中央部から狭端部方向に描かれた人物の全容は明らかであるが、広端部方向に描かれた人物は腰以下が欠損している。共に丸い顔面に目・鼻・口が表現されているが全体に不鮮明である。頸は直線的で、腕は肩部から上方に大きく開き、バンザイをした形で表現されている。腕は手に行くに従って細くなるように表現されたり、手は楓状を呈している。胴部は卵形でやや長く、胴の下部から伸びる足は2本平行する線状で短く表現されているが足先の表現は行われていない。凸面には糸切り、縄叩き、離れ砂が残る。色調は淡灰色～黒灰色。焼成は良好である。井戸の帰属時期は12世紀末が推定される。



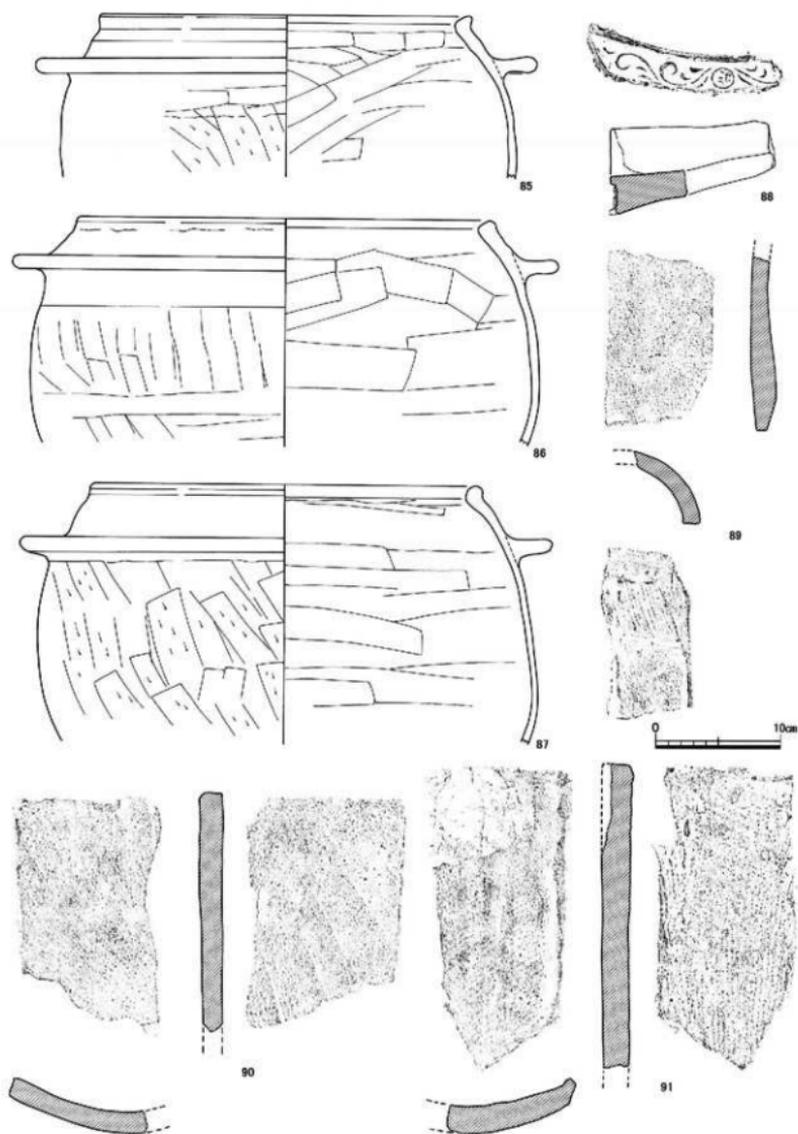
第24図 第3区 SE 105断面図(S=1/40)

SE 105(第24～26図、図版五・二三～二五)

調査区北部の1c地区で検出した。曲物+土釜積み上げ井戸である。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西径2.60m、南北径3.15m、深さ1.58mを測る。掘方の中央部からやや南に井戸側が設置されている。最下段が曲物で、その上部に土釜を積み上げるものであるが、調査時点の記録が不完全で不明である。井戸側上面の幅は38cmを測る。遺物は鎌倉時代前期から中期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦が多数出土している。22点(70～91)を図化した。70～74は土師器小皿。75・76は東播系須恵器鉢。77～80は和泉型瓦器碗である。4点は和泉型で口径13.9～

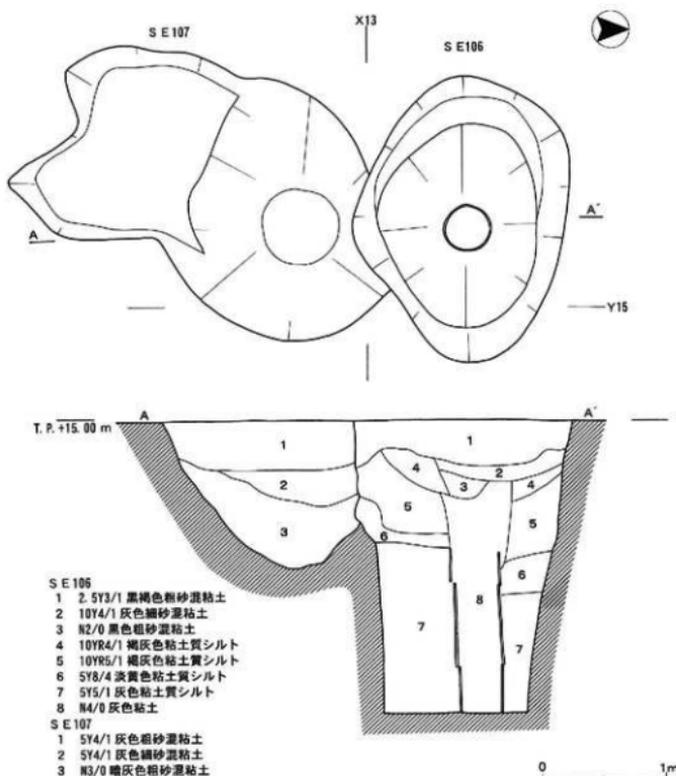


第25图 第3区 SE105出土遺物実測図-1



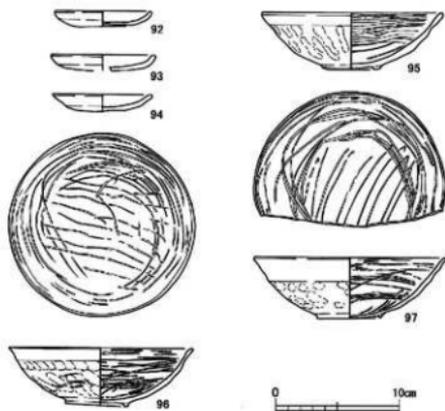
第26图 第3区 SE105出土物实测图-2

15.5cm、器高3.6~4.5cm、高台径3.6~4.4cm、高台高0.2~0.3cmを測る。扁平な体部に形骸化した高台が付くもので、見込みのヘラミガキは平行線状が80、渦巻状が77、連結輪状が78・79である。尾上編年のIV-1期。81~87は土師器羽釜で井戸側に使用されたものであるが、調査時の井戸側崩壊により各遺物と井戸側との対応は出来ない。81~87は森島編年の河内型A型式で81~84が13世紀中葉、85~87が13世紀後半に比定される。88はキリークの梵字を中心飾りに持つ梵字唐草文軒平瓦である。瓦当面の約2/3が残存している。下外縁を欠くが中央部分で幅3.0cmを測る。凹面は瓦当端から約1.5cmがヘラケズリの他は布目痕。凸面は縦方向にヘラケズリが行われている。89は行基葺き丸瓦である。凹面は布目、凸面はナデが行われている。90・91は平瓦片である。90の凹面はナデ。凸面は縄叩きと離れ砂が付着。91の凹面は糸切り、布目。凸面は縄叩き、離れ砂が付着。凹面の前面に煤が付着している。井戸の帰属時期は13世紀後半である。



第27図 第3区 S E 106、107平面図(S=1/40)

SE 106(第27・28図、図版六・二五)
 3cd地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈する曲物積み上げ井戸で、南部でSE 107を切っている。東西径2.37m、南北径1.70m、深さ2.04mを測る。曲物井戸側は掘方のほぼ中央部に設置されており、検出時点で4段分が残存していた。埋土は掘方内が1～7層、井戸側内が8層で、上部の堆積状況から井戸側内は抜き取られたものと推定される。遺物は井戸側内および掘方内から平安時代末期を中心とする土師器、須恵器、瓦器、屋瓦が多数出土している。6点(92～97)を図化した。92～94が埋土上部層、95～

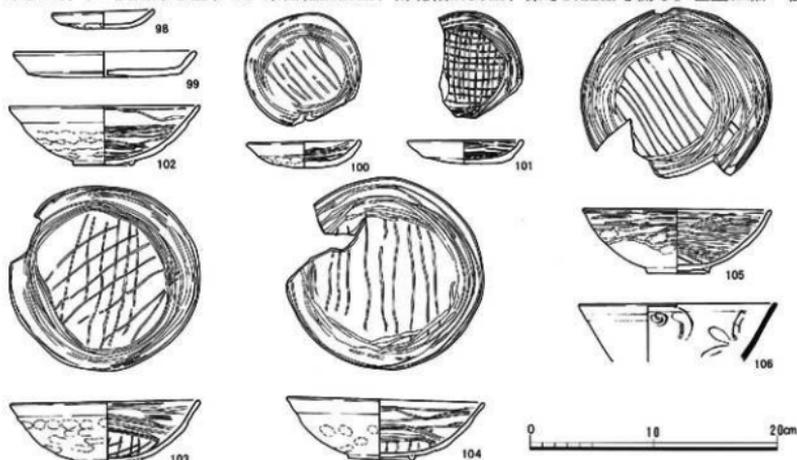


第28図 第3区 SE 106出土遺物実測図

97が曲物井戸側内(8層)から出土している。92～94は土師器小皿である。95～97は和泉型瓦器碗で96が完形品で口径14.7cm、器高4.8cm、高台径4.6cm、高台高0.6cmを測る。3点ともに体部外面に指頭圧痕が明瞭に残るもので、見込みには平行線状ヘラミガキが行われている。尾上編年のⅢ-1期に比定される。井戸の帰属時期は12世紀後半が推定される。

SE 107(第27・29図、図版七・二六・二七)

素掘り井戸で北端がSE 106に切られている。掘方は、円形状の井戸本体の南に舌状に広がる部分が付く二段掘方を呈する。東西幅2.10m、南北幅2.90m、深さ1.22mを測る。埋土は細～粗



第29図 第3区 SE 107出土遺物実測図

砂を含む3層から成る。遺物は平安時代末期に比定される土師器、瓦器、中国産磁器、屋瓦がコンテナ1箱程度出土している9点(98~106)を図化した。98は土師器小皿。99は土師器中皿である。100・101は瓦器小皿である。見込みのヘラミガキは100が平行線状、101が格子状である。瓦器碗は4点(102~105)で、全て和泉型である。見込みのヘラミガキは103が粗い格子状、他は平行線状である。尾上編年のⅡ-3期にあたる。106は中国産青磁碗の細片である。体部内面に蓮華文が片彫りされている。横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2a類にあたる。遺構の帰属時期は12世紀後半が推定される。

土坑(SK)

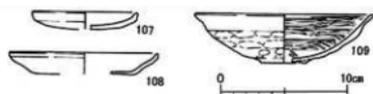
総数で20基(SK101~120)を検出した。分布状況は散発的であるが、SK103・105・107~110・116・120・121のように井戸に隣接して設置されているものが多い傾向が認められ、一部は井戸に付随した施設であった可能性がある。出土遺物を掲載した遺構を中心に記載し、その他は一覧表に示した。

SK102(第30・36図、図版二七)

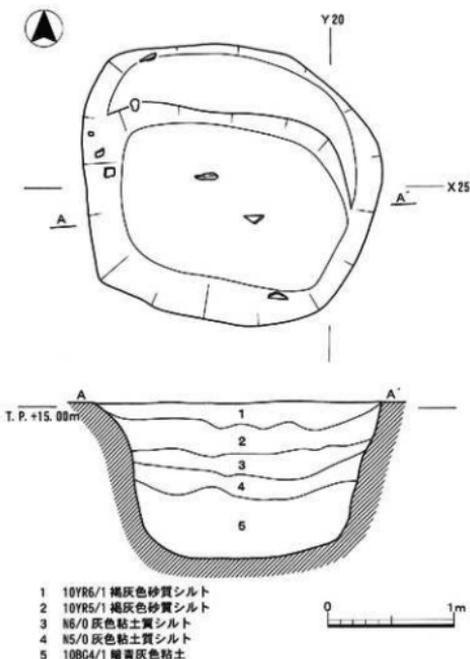
調査区中央部の5bc地区で検出した。東部が攪乱、北部が側溝により削平を受ける。検出部分が東西幅2.85m、南北幅1.35m、深さ0.34mを測る。埋土は10YR4/4褐色細砂混粘土の単一層である。遺物は平安時代末期から鎌倉時代初頭に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦の細片が少量出土している。3点(107~109)を図化した。107は土師器小皿、108は土師器中皿である。109は和泉型の瓦器碗である。やや扁平な体部に形骸化した貼り付け高台が付くもので、見込みに平行線状ヘラミガキが施されている。尾上編年のⅢ-2期に比定される。遺構の帰属時期は12世紀末から13世紀初頭が推定される。

SK105(第31・32図、図版二七)

5・6de地区で検出した。不整形円形を呈するもので、北東部でSD



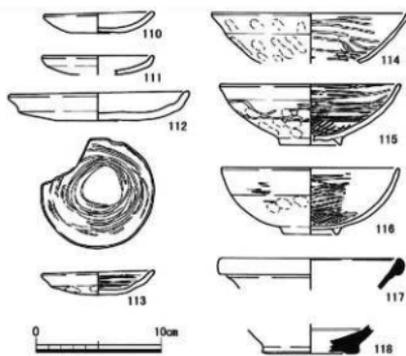
第30図 第3区 SK102出土遺物実測図



- 1 10YR6/1 褐色色砂質シルト
- 2 10YR5/1 褐色色砂質シルト
- 3 N6/0 灰色粘土質シルト
- 4 N5/0 灰色粘土質シルト
- 5 10B04/1 暗黄灰色粘土

第31図 第3区 SK105断面図(S=1/40)

108を切っている。二段掘方を呈するもので、北部にテラス部分を有する。東西径2.35m、2.35m、深さ1.28mを測る。埋土は5層が断面形状に沿って堆積している。遺物は2層を中心に平安時代末期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦、石材が多数出土している。9点(110~118)を図化した。110・111は土師器小皿。112は土師器中皿である。113は瓦器小皿である。口縁部の一部を欠く。口径9.05cm、器高2.0cmを測る。見込みには渦巻き状ヘラミガキが施されている。114~116は瓦器椀である。体部外面に僅かにヘラミガキを施す115とヘラミガキが行われない114・116がある。見込みの

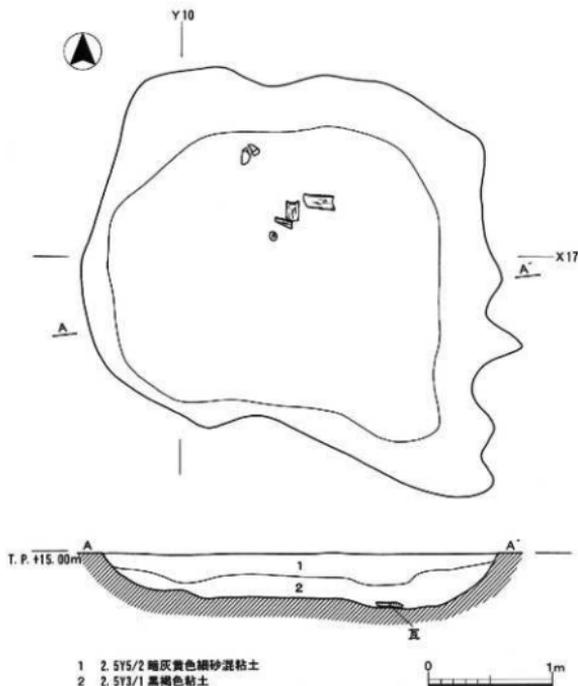


第32図 第3区 SK 105出土遺物実測図

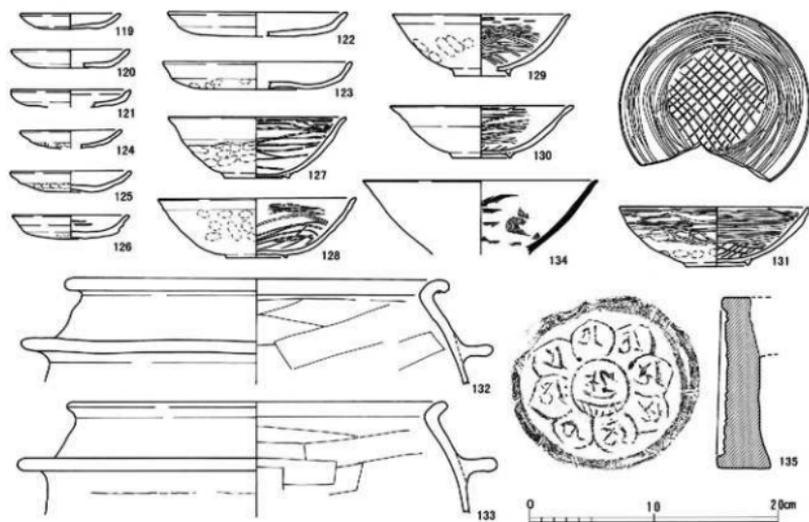
ヘラミガキは格子状である。尾上編年のⅢ-1期に比定される。117・118は中国産白磁碗の細片である。横田・森田分類の白磁椀Ⅳ-2類にあたる。遺構の帰属時期は12世紀末が推定される。

SK 107(第33・34図、図版八・二七・二八)

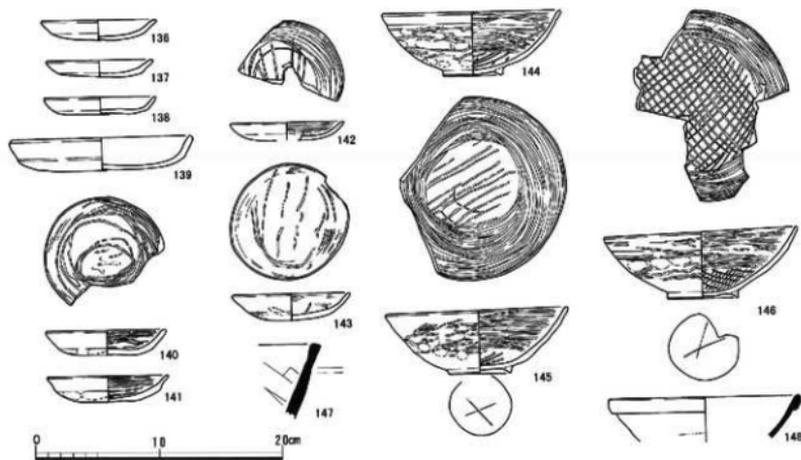
4bc地区で検出した。不定形を呈するものでSD 106を切っている。東西幅3.4m、南北3.0m、深さ0.45mを測る。埋土は粘土を主体とする2層(1・2層)から成る。遺物は1・2層から平安時代末期に比定される土師器、須恵器、瓦器、国産陶器、中国産白磁、屋瓦、石材等が多数出土しており、1層からは梵字文軒丸瓦が出土している。17点(119~135)を図化した。



第33図 第3区 SK 107平面図(S=1/40)



第34図 第3区 SK 107出土遺物実測図



第35図 第3区 SK 108出土遺物実測図

119～121は土師器小皿。122・123は土師器中皿。124～126は瓦器小皿。127～131は瓦器椀である。そのうち131が型的に古く尾上繩年のⅡ-2期、その他はⅡ-3期にあたる。132・133は土師器羽釜の細片である。134は中国産白磁碗である。体部内面に御描の花文が施文されている。

横田・森田分類の白磁碗V 4類にあたる。135は3・4と同范瓦の梵字文軒丸瓦である。瓦当面が楕円形を呈する雑な作りで、外縁幅が一定でない。色調は赤褐色。遺構の帰属時期は12世紀後半が推定される。

SK108(第35・36図、図版八・二九)

3c地区で検出した。SE107の西側に近接している。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西径2.10m、南北径1.11m、深さ1.28mを測る。埋土は粘土を主体とする4層からなる。遺物は平安時代後期に比定される土師器、須恵器、瓦器、中国産白磁、屋瓦等が少量出土している。13点(136~148)を図化した。136~138は土師器小皿である。139は土師器中皿。140~143は瓦器小皿である。見込み部のヘラミガキは渦巻き状が140、平行線状が141~143である。144~146は瓦器碗である。法量は口径14.5~15.4cm、器高5.2~5.45cm、高台径4.5~5.6cm、高台高0.4~0.6cmを測る。深目の体部に「ハ」の字に開く貼り付け高台が付くもので、全て和泉型に分類される。体部は外面が横方向のヘラミガキ、内面は密なヘラミガキで、見込みのヘラミガキは平行線状の144・145と格子状の146がある。145・146の裏面に「×」の記号がヘラにより記されている。3点共に尾上編年のⅡ-2期にあたる。147は東播系須恵器鉢の細片である。148は中国産白磁碗の細片である。横田・森田分類の白磁碗Ⅳ-2類にあたる。遺構の帰属時期は12世紀中葉が推定される。

SK110(第36・37図、図版九・三〇)

調査区中央部東端の4e地区で検出した。東部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.04m、南北幅2.75mを測る。断面形状は浅い皿状で、深さは0.17mを測る。埋土は10Y3/1オリーブ黒色細粒砂混粘土である。遺物は平安時代後期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦等が少量出土している。4点(149~152)を図化した。149は土師器小皿。150・151は瓦器小皿である。152は土師器羽釜片である。遺構の帰属時期は12世紀中葉前後が推定される。

SK111(第36・37図、図版一〇・三〇)

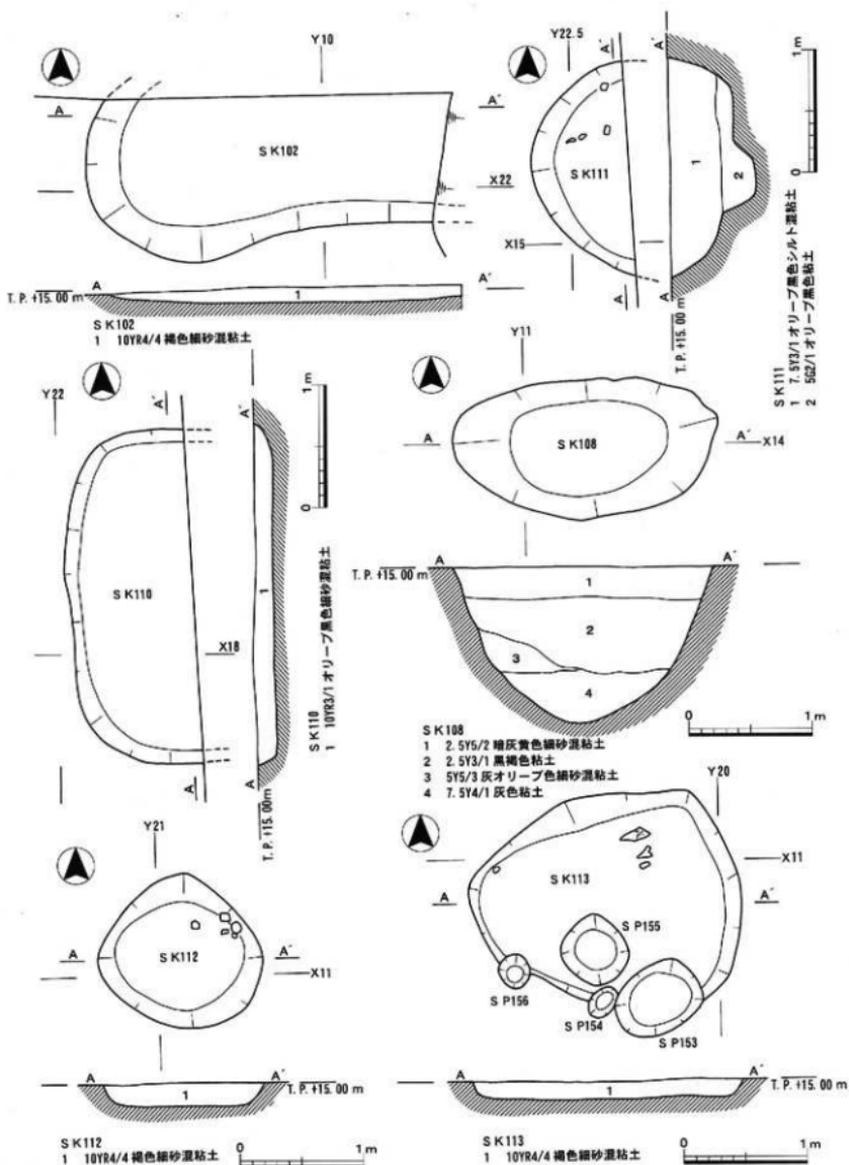
SK110の北に隣接している。東部が調査区外に至る。検出部分で東西幅0.8m、南北幅1.75m、深さ0.7mを測る。埋土は2層から成る。遺物は1層から平安時代後期に比定される土師器、須恵器、瓦器、中国産白磁、屋瓦、石材が少量出土している。4点(153~156)を図化した。153・154は土師器小皿。155は瓦器碗片。尾上編年のⅢ-1期にあたる。156は東播系の須恵器で、法量から碗に分類されるものである。森田編年の第Ⅱ期第2段階にあたる。遺構の帰属時期は12世紀後半が推定される。

SK112(第36・37図、図版一〇・三〇)

調査区北東部の3e地区で検出した。SD115を切っている。不整形で東西径1.35m、南北径1.27mを測る。断面形状は浅い皿状で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/4褐色細砂混粘土である。遺物は平安時代後期に比定される土師器、瓦器、石材が少量出土している。3点(157~159)を図化した。157・158は土師器小皿。159は瓦器碗である。尾上編年のⅡ-3期に比定される。遺構の帰属時期は12世紀後半が推定される。

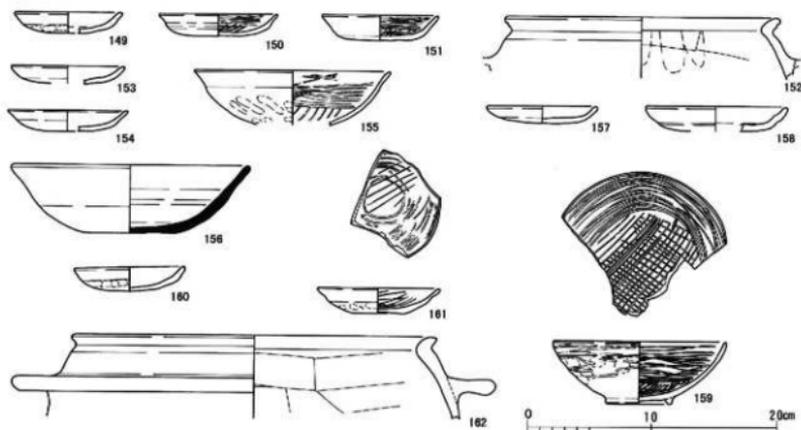
SK113(第36・37図、図版一一・三〇)

SK112の西部に近接している。SP153~156に切られている。不整形を呈するもので、東西幅2.23m、南北幅1.73mを測る。断面形状は浅い皿状で、深さ0.13mを測る。埋土は10YR4/4褐



第36図 第3区 SK102、SK108、SK110~113断面図(S=1/40)

色細砂混粘土である。遺物は平安時代後期に比定される土師器、瓦器、屋瓦、石材が少量出土している。3点(160~162)を図化した。160は土師器小皿。161は瓦器小皿。162は土師器羽釜片である。遺構の帰属時期は12世紀後半が推定される。



第37図 第3区 SK110(149~152)、SK111(153~156)、SK112(157~159)、SK113(160~162)出土遺物実測図

第2表 第3区 1面 土坑(SK)測量表(単位m)

遺構名	地区	形状	東西幅	南北幅	深さ	埋土	出土遺物
SK101	5 a	隅丸方形	1.50	1.10	0.22	10YR3/2黒褐色砂質シルト	土師器、瓦器、屋瓦 13C前
SK103	6 c d	楕円形	1.40	1.80	0.14	10YR5/2灰黄褐色砂質シルト	土師器、瓦器、石材 13C前
SK104	7 d	*	0.98	0.70	0.10	10YR3/2黒褐色砂質シルト	土師器、須恵器、瓦器、 屋瓦 13C後
SK106	6 d e	*	1.42	0.90	0.19	10YR5/2灰黄褐色砂質シルト	土師器、瓦器、陶器、屋瓦 13C後半
SK109	2・3 c d	不整形	3.70	3.30	0.35	25Y4/3暗オリーブ褐色粗砂泥粘土	-
SK114	2 d	楕円形	1.05	2.10	0.17	25Y3/3暗オリーブ褐色粗砂泥粘土	-
SK115	2 c	不整形	1.30	1.85	0.25	*	-
SK116	1・2 c d	円形	2.75	2.05	0.29	*	-
SK117	1 e	隅丸方形	1.05	1.10	0.22	25Y4/6オリーブ褐色粘土	-
SK118	1・2 d	不定形	0.65	1.05	0.02	*	-
SK119	1 d	円形	2.15	2.10	0.20	7.5Y5/1灰色細砂混粘土	-
SK120	1 c d	*	0.95	0.90	0.25	*	-
SK121	1 c	*	1.30	1.20	0.60	*	土師器

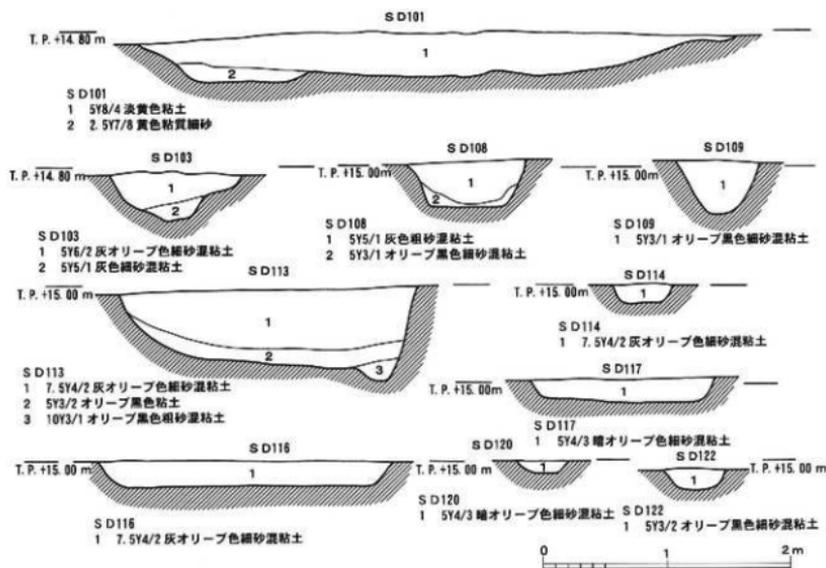
溝(SD)

総数で26条(SD101~126)を検出した。調査区西部を中心に南北方向に伸びるSD101~103、112・126については、調査区の西側に西水川が存在しているため、西水川と集落域を画する目的で開削された溝群と推定される。それらの溝に合流する東西方向の溝については、西方に流下するもので、集落外への排水の役割を果たしたものと推定される。また、屈曲し「L」字状を呈するSD108・114については、居住域内の空間を区画する役割を果たしたものと推定される。

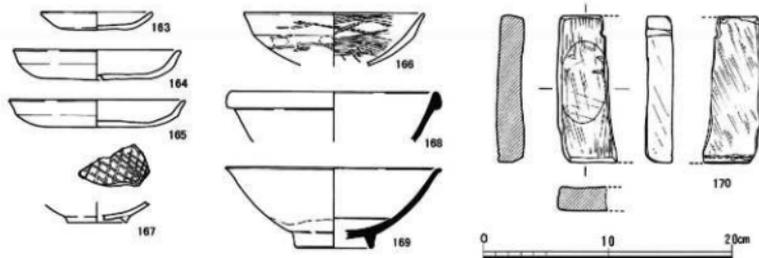
出土遺物を掲載した遺構については、本文で記述し、それ以外のものについての詳細は第3表に示した。

SD101(第38・39図、図版一・三〇)

調査区西端で検出した。緩やかなカーブを描き南北方向に伸びるもので、東部が二段掘方を有している。検出長35.5m、最大幅4.7m、深さ0.39mを測る。溝の断面形状は皿状で、溝底の南端部の標高がT.P.+14.351m、北端部がT.P.+14.376mでほぼ平坦である。埋土は2層から成るがそのうち上層の1層が大半を占める。出土遺物は1層から平安時代末期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦、石製品が多数出土している。8点(163~170)を図化した。163は土師器小皿。164・165は土師器中皿。瓦器椀は2点(166・167)である。166は体部外面にやや粗いヘラミガキが施されている。167は見込みみに格子状ヘラミガキが施されている。尾上編年のⅢ-1期に比定される。168・169は中国産白磁碗である。168が玉縁状の口縁部を持つもので横田・森田分類の白磁碗Ⅳ-2類。169は高台が高く、口縁部が外折する形態を持つもので、横田・森田分類の白



第38図 第3区 SD101、103、108、109、113、114、116、117、120、122断面図(S=1/40)

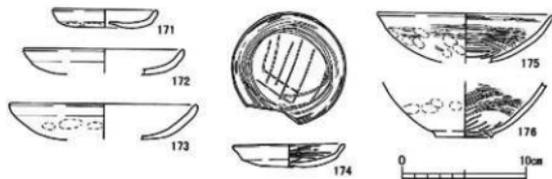


第39図 第3区 SD101出土遺物実測図

磁碗V-3類に比定される。170は砥石である。上部中央に径5cm程度の穿孔があり、その部分を境に縦方向に欠損している。残存部分で長さ12.0cm、幅42.5cm、厚さ1.9cmを測る。2面に使用面が認められ、そのうちの1面の中央部は窪んでいる。なお、石材が滑石で上部に穿孔があることから温石であった可能性がある。遺構の帰属時期は12世紀後半である。

SD103(第38・40図、図版一二・三一)

SD112の東に並行している。SD104・106・107・113・122~124を切っている。検出長36.0m、幅1.20m、深さ0.41mを測る。埋土は2層で上層が5Y6/1灰オリーブ色細砂混粘土、下層が5Y5/1灰色細砂混粘



第40図 第3区 SD103出土遺物実測図

土である。出土遺物は上層を中心に平安時代末期から鎌倉時代初頭に比定される土師器、瓦器、屋瓦等が少量出土している。6点(171~176)を図化した。171は土師器小皿。172・173は土師器中皿の細片である。174は瓦器小皿。見込みに平行線状ヘラミガキが施されている。175・176は和泉型瓦器碗である。175は体部外面に横方向のヘラミガキが施されている。176は口縁部を欠く。見込みに平行線状ヘラミガキが行われている。尾上編年のⅢ-1期に比定される。遺構の帰属時期は平安時代末期から鎌倉時代初頭(12世紀末から13世紀初頭)である。

SD108(第38・41図、図版三一)

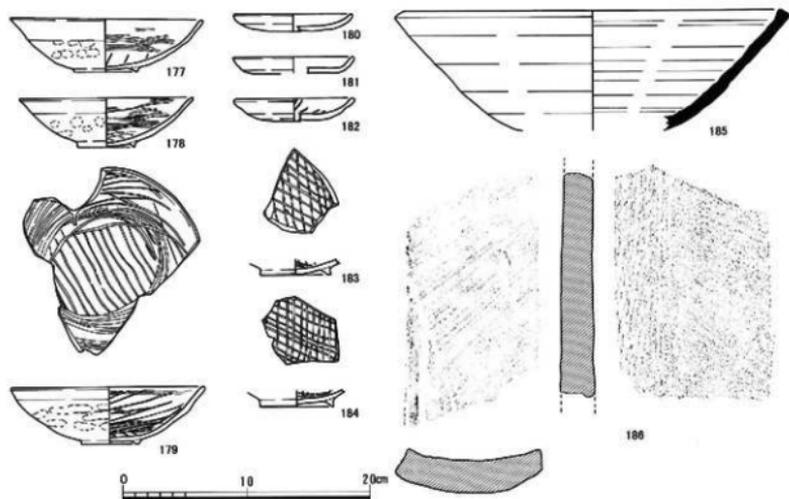
調査区中東部の5de地区で検出した。東西方向に伸びるもので、西端はSK105に切られている。検出部分で長さ3.30m、幅0.95m、深さ0.35mを測る。断面形状は台形状で、埋土は2層からなる。出土遺物は平安時代末期から鎌倉時代初頭の土師器、須恵器、瓦器、屋瓦、石材等が少量出土している。瓦器碗3点(177~179)を図化した。3点とも碗形の体部に高台高の低い貼付け高台が付くもので、口径13.8~15.5cm、器高4.35~4.7cm、高台径4.6~5.0cm、高台高0.3~0.5cmを測る。体部外面にヘラミガキが行われない段階のもので、見込みには平行線状ヘラミガキが行われている。外面のヘラミガキを欠くが法量等からみて尾上編年のⅢ-1~2期に比定される。遺構の帰属時期は12世紀末から13世紀初頭が推定される。

SD109(第38・41図、図版一二・三一)

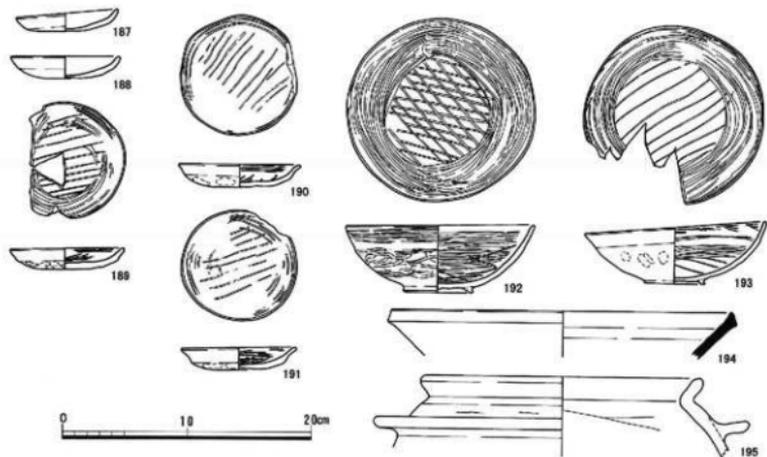
SD108の北に隣接して並行に伸びる。東端がSE102、西端がSE101に切られている。検出長2.50m、幅0.60m、深さ0.34mを測る。埋土は5Y3/1オリーブ黒色細砂混粘土である。出土遺物は平安時代後期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦等が極少量出土している。7点(180~186)を図化した。180~182は土師器小皿の細片である。183・184は瓦器椀で共に底部のみが残存している。見込みに格子状ヘラミガキが施文されている。185は東播系の須恵器鉢(片口鉢)の細片である。復元口径30cmを測る。森田編年の第1期第2段階に比定され、12世紀後半のものと推定される。186は鬘斗瓦と推定される。両端を欠くが、幅は平瓦を半載した大きさよりやや小さいもので、幅10.5cm、厚さ2.7cmを測る。凹面に糸切りと布目痕、凸面に縄叩きが施されている。出土遺物からみて、遺構の帰属時期は平安時代後期(12世紀後半)が推定される。

SD113(第38・42図、図版三二)

調査区北中部の3b地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、東部がSE106・107、西端がSD103、南部がSK108に切られている。西部に行くに従って幅を減じており、検出部分で長さ10.2m、幅0.7~3.1m、深さ0.6mを測る。埋土は粘土を主体とする3層から成る。出土遺物は平安時代後期を中心とする土師器、瓦器、屋瓦が多数出土している。9点(187~195)を図化した。187・188は土師器小皿である。189~191は瓦器小皿で、190・191がほぼ完形である。口縁部が斜上方に伸びる189と外反する190・191がある。見込みには平行線状ヘラミガキが施されている。192・193は和泉型瓦器椀である。型的的には192が古く尾上編年のⅡ-2期、193がⅡ-3期に比定される。194は東播系須恵器片口鉢の細片で、復元口径27.3cmを測る。森田編年の第Ⅱ期第2



第41図 第3区 SD108(177~179)、SD109(180~186)出土遺物実測図

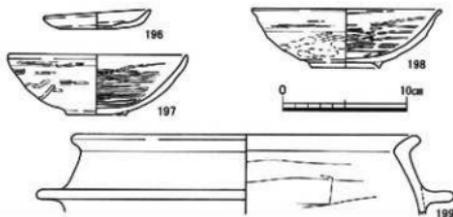


第42図 第3区 SD113出土遺物実測図

段階にあたる。195は土師器羽釜の細片である。森島編年の河内産A型式に比定される。193の瓦器碗から勘察して廃絶時期は12世紀後半が推定される。

SD114(第38・43図、図版三二・三三)

調査区中東部で検出した。幅0.7m程度の小溝で、東から西に約4.5m伸びた後、屈曲して南に約5.6m伸びるもので、南端でSD104と合流している。断面形状は皿状で深さ0.15mを測る。埋土は7.5Y4/2灰オリブ色細砂混粘土の単一層である。出土遺物は平安時代後期を中心とする土師器・須恵器、瓦器、国産陶器、屋瓦が少量出土している。4点(196~199)を図化した。



第43図 第3区 SD114出土遺物実測図

196は土師器小皿である。完形品で口径8.6cm、器高1.2cmを測る。197・198は和泉型瓦器碗である。尾上編年のII-3期に比定される。199は土師器羽釜の細片である。森島編年の河内産A型式に比定される。遺構の帰属時期は12世紀後半が推定される。

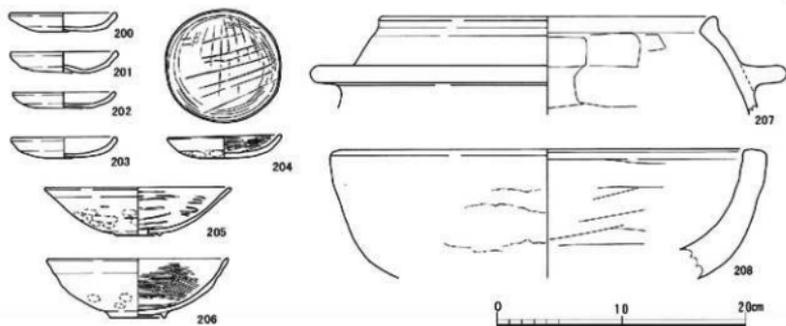
SD116(第38・44図、図版一三・三三)

調査区北東部の2de地区で検出した。東西方向に伸びるもので、SD117・118を切り、SK109・SP163・164に切られている他、東部は調査区外に至る。検出部で長さ4.7m、幅2.5mを測る。断面形状は皿状で深さ0.2mを測る。埋土は7.5Y4/2灰オリブ色細砂混粘土の単一層である。出土遺物は鎌倉時代初頭に比定される土師器、須恵器、瓦器、国産陶器、中国産磁器、屋瓦が多数出土している。9点(200~208)を図化した。200~203は土師器小皿。204は瓦器小皿で

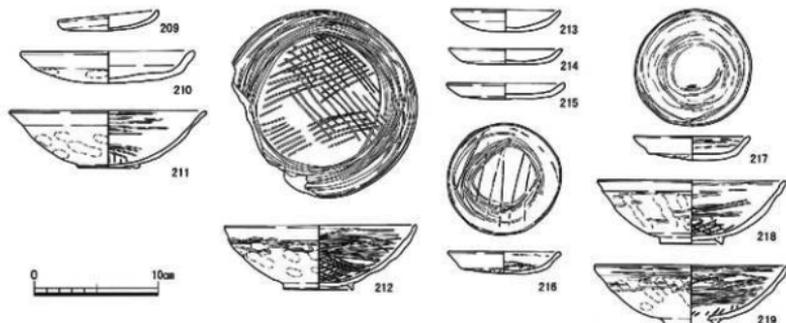
見込みに平行線状ヘラミガキが行われている。205・206は和泉型瓦器碗である。共に見込みに平行線状ヘラミガキが行われている。205が尾上編年のⅢ-2期、206がⅢ-1期に比定される。207は土師器羽釜である。森島編年の河内産のA型式に比定される。208は瓦質鉢片である。大形品で厚い器壁を持つ。時期幅のある遺物が出土しているが、最も新しい遺物からみて遺構廃絶時期は13世紀前半が推定される。

SD117(第38・45図、図版一三・三三)

調査区北東部で検出した。南北方向に伸びるもので、北部で二方向に分岐している。北端でSD119を切り、南端でSD116に切られている。検出長2.95m、幅1.65mを測る。断面形状は皿状で深さ0.18mを測る。埋土は5Y4/3暗オリーブ色細砂混粘土の単一層である。出土遺物は鎌倉時代初頭を中心とする土師器、須恵器、瓦器、屋瓦が多数出土している。3点(209~211)を図化した。209は土師器小皿。210は土師器中皿。211は和泉型瓦器碗。見込みに平行線状ヘラミガキが行われている。尾上編年のⅢ-2期に比定される。遺構の帰属時期は12世紀末から13世紀初頭が推定される。



第44図 第3区 SD116出土遺物実測図



第45図 第3区 SD117(209~211)、SD120(212)、SD122(213~219)出土遺物実測図

SD120(第38・45図、図版三四)

調査区北東部の1・2d地区で検出した。東西方向に伸びる小溝で、全長2.4m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は5Y4/3暗オリーブ色細砂混粘土の単一層である。出土遺物は平安時代後期の土師器、須恵器、瓦器が極少量出土している。瓦器碗1点(212)を図化した。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径15.3cm、器高5.2cm、高台径5.5cm、高台高0.4cmを測る。尾上編年のII-3期に比定される。遺構の帰属時期は12世紀後半である。

SD122(第38・45図、図版三四)

調査区北部の1・2b地区で検出した。幅0.6m程度の小溝で、西から東に約2.8m伸びた後、屈曲して南に約4.95m伸びるもので、西端がSD103、屈曲部分がSK116に切られている。埋土は5Y3/2オリーブ黒色細砂混粘土の単一層である。出土遺物は平安時代後期の土師器、須恵器、瓦器、屋瓦が少量出土している。7点(213~219)を図化した。213~215は土師器小皿である。216・217は瓦器小皿である。218・219は瓦器碗である。尾上編年のII-3期に比定される。遺構の帰属時期は12世紀後半である。

第3表 第3区 第1面 溝(SD)法量表(単位m)

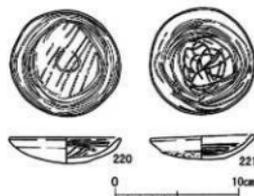
遺構名	地区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
SD 102	1b-8b	35.9	0.45	0.10	5Y7/6黄色シルト質粘土	土師器・須恵器・瓦器・ 屋瓦・中国産磁器・石材
SD 104	3e-8a	29.5	0.70	0.38	10YR4/2灰黄褐色砂質シルト	土師器・瓦器・屋瓦
SD 105	7・8bc	2.70	0.35	0.13	5Y7/6黄色シルト質粘土	土師器・瓦器・屋瓦
SD 106	4a-4e	1.75	0.65	0.40	*	土師器・瓦器
SD 107	6e	15.2	0.40	0.11	*	土師器・瓦器・屋瓦
SD 110	7・8c	6.80	0.50	0.11	*	-
SD 111	7cd	0.80	1.80	0.33	*	-
SD 112	1b-5・6b	21.8	0.80	0.10	*	土師器・須恵器・瓦器・ 屋瓦
SD 115	2・3d-3e	5.20	0.75	0.15	7.5Y4/2灰オリーブ色細砂混粘土	土師器・瓦器・国産陶器・ 屋瓦
SD 118	1・2e	3.30	0.45	0.10	5Y4/3暗オリーブ色細砂混粘土	-
SD 119	1de	3.20	0.45	0.10	*	土師器・瓦器
SD 121	1d	1.20	0.55	0.10	*	瓦器
SD 123	2bc	2.50	0.25	0.10	5Y3/2オリーブ黒色細砂混粘土	-
SD 124	3b	1.40	0.40	0.15	*	-
SD 125	4・5a	4.80	0.30	0.10	5Y4/3暗オリーブ色細砂混粘土	-
SD 126	1b-4a	19.2	0.35	0.10	5Y7/6黄色シルト質粘土	-

小穴・柱穴(SP)

総数で87個(SP101~187)を検出した。調査区南部で検出したSP101~103の3個を除けば、調査区の中央部から北東部にかけて密集した分布状況が窺える。平面の形状は円形、不整形円形、楕円形、不整形がある。法量としては径0.10~1.20m、深さ0.02~0.30mを測る。そのうち出土遺物が出土したものは、SP101・102・105・113・114・116・119・120・123・125・127・137~139・141・143・144・146・149~151・153・157・158である。出土遺物を掲載したのはSP144である。各小穴の法量等の詳細は第4表で示した。

SP144出土遺物(第46図、図版一三・三四)

瓦器小皿2点(220・221)を図化した。共に完形品で、220は口径9.05cm、器高2.1cm、211は口径8.5cm、器高2.1cmを測る。口縁部外面は共にヨコナデ。底部外面は220がナデ、221が指頭圧痕を残す。見込みのヘラミガキは220が平行線状、221が乱方向である。色調は灰色で焼成は良好である。12世紀後半が推定される。



第46図 第3区 SP144出土遺物
実測図

第4表 第3区 第1面 小穴・柱穴(SP)量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP101	7 b	円形	0.40	0.35	0.13	10YR2/2黒褐色細砂泥粘土	土師器・瓦器
SP102	7 b c	楕円形	0.45	0.40	0.16	*	土師器・瓦器
SP103	8 d	不定形	(0.20)	0.35	0.20	*	-
SP104	7 d	円形	0.40	0.35	0.14	*	-
SP105	4 c	楕円形	0.32	0.15	0.16	*	土師器・瓦器
SP106	*	円形	0.30	0.31	0.08	*	-
SP107	*	*	0.18	0.15	0.10	*	-
SP108	*	*	0.20	0.19	0.07	*	-
SP109	*	*	0.30	0.25	0.14	*	-
SP110	*	*	0.25	0.25	0.15	*	-
SP111	*	*	0.25	0.20	0.09	*	-
SP112	4 b	*	0.30	0.29	0.08	*	-
SP113	4 b c	*	0.45	0.40	0.09	*	瓦器
SP114	4 c	*	0.20	0.15	0.06	*	土師器
SP115	*	楕円形	0.35	0.25	0.11	*	-
SP116	4 b c	*	0.45	0.25	0.09	*	土師器・瓦器
SP117	4 b	*	0.25	0.20	0.06	*	-
SP118	*	円形	0.50	0.45	0.12	*	-
SP119	*	*	0.45	0.40	0.19	*	瓦器
SP120	3 b c	*	0.35	0.30	0.17	*	土師器・瓦器・陶器
SP121	4 c	*	0.27	0.25	0.08	*	-
SP122	3・4 c	楕円形	0.55	0.45	0.18	*	-
SP123	3 c	円形	0.22	0.20	0.08	*	土師器・瓦器
SP124	3 c	*	0.23	0.23	0.10	*	-
SP125	4 c	*	0.32	0.32	0.08	*	須恵器・瓦器
SP126	*	楕円形	0.55	0.35	0.07	*	-
SP127	*	不整形円形	0.65	0.45	0.10	*	土師器・瓦器13C中～後半
SP128	*	楕円形	0.30	0.20	0.09	*	-
SP129	*	*	0.40	0.20	0.03	*	-
SP130	*	円形	0.25	0.28	0.02	*	-
SP131	*	*	0.13	0.14	0.09	*	-
SP132	*	不整形円形	0.28	0.20	0.02	*	-

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP133	4 c	円形	0.22	0.20	0.13	10YR2/2黒褐色細砂混粘土	-
SP134	*	楕円形	0.45	0.25	0.14	*	-
SP135	*	円形	0.22	0.18	0.06	*	-
SP136	*	*	0.35	0.35	0.07	*	-
SP137	*	*	0.10	0.10	0.08	*	土師器・瓦器
SP138	*	*	0.20	0.20	0.06	*	土師器・瓦器
SP139	4 e	*	0.35	0.35	0.07	*	土師器・瓦器
SP140	4 d	*	0.30	0.25	0.10	*	-
SP141	*	*	0.25	0.25	0.09	*	土師器・瓦器
SP142	*	楕円形	0.51	0.35	0.24	*	-
SP143	4 e	円形	0.42	0.40	0.13	*	土師器・須恵器・瓦器・ 中国産磁器
SP144	3 c	*	0.95	0.90	0.30	*	土師器・瓦器
SP145	*	楕円形	0.65	0.45	0.03	*	-
SP146	*	隅丸方形	0.90	0.45	0.02	*	土師器・須恵器・瓦器
SP147	*	楕円形	0.70	0.48	0.15	*	-
SP148	*	円形	0.70	0.65	0.20	*	-
SP149	*	不整形	1.00	1.15	0.17	*	土師器・瓦器
SP150	*	円形	0.35	0.30	0.10	*	土師器・瓦器
SP151	*	不整形	0.50	0.35	0.07	*	土師器
SP152	*	円形	0.25	0.25	0.12	*	-
SP153	3 d	楕円形	0.75	0.70	0.13	*	土師器・瓦器
SP154	*	*	0.25	0.20	0.06	*	-
SP155	*	円形	0.55	0.57	0.11	*	土師器・瓦器
SP156	*	*	0.26	0.25	0.04	*	-
SP157	*	楕円形	0.85	0.55	0.12	*	土師器
SP158	*	*	0.90	0.70	0.25	*	土師器・瓦器・中国 産磁器
SP159	*	円形	0.40	0.28	0.04	*	-
SP160	2 c	楕円形	0.85	0.70	0.16	*	-
SP161	*	円形	0.30	0.25	0.11	*	-
SP162	*	*	0.40	0.35	0.05	*	-
SP163	2 d	*	0.45	0.35	0.22	*	-
SP164	2 d c	*	0.25	0.25	0.22	*	-
SP165	2 d	*	0.35	0.30	0.18	*	-
SP166	*	*	0.42	0.40	0.21	*	土師器
SP167	*	楕円形	0.45	0.35	0.13	*	-
SP168	*	円形	0.25	0.25	0.19	*	-
SP169	*	楕円形	0.25	0.15	0.07	*	-
SP170	*	*	0.30	0.22	0.21	*	-
SP171	*	円形	0.20	0.18	0.12	*	-
SP172	2 e	楕円形	0.30	0.20	0.04	*	-
SP173	1 e	*	0.42	0.30	0.15	*	-
SP174	1 d	*	0.25	0.20	0.17	*	-
SP175	1 c	不整形	0.55	0.45	0.09	*	瓦器

遺構名	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
S P 176	1 e	円形	0.45	0.40	0.06	10YR2/2黒褐色細砂混粘土	-
S P 177	*	楕円形	0.45	0.35	0.29	*	土師器・須恵器・瓦器・ 磁瓦・石材
S P 178	1 d	円形	0.25	0.25	0.13	*	-
S P 179	2 d	*	0.20	0.20	0.16	*	-
S P 180	1 d	*	0.55	0.50	0.08	*	-
S P 181	*	*	0.55	0.45	0.16	*	土師器
S P 182	1 d	*	0.50	0.50	0.07	*	土師器
S P 183	1・2 c	*	0.25	0.23	0.09	*	-
S P 184	3 d	*	0.50	0.45	0.30	*	土師器
S P 185	3 d e	不整形	1.20	0.55	0.18	*	土師器・瓦器
S P 186	3 d	楕円形	0.45	0.30	0.05	*	-
S P 187	*	円形	0.30	0.25	0.19	*	-

第2面(第47図、図版一四)

第1面を検出した第2層から約0.28m下部に存在する第3層上面で検出した。古墳時代中期を中心とする小穴3個(S P 201~203)を検出した。

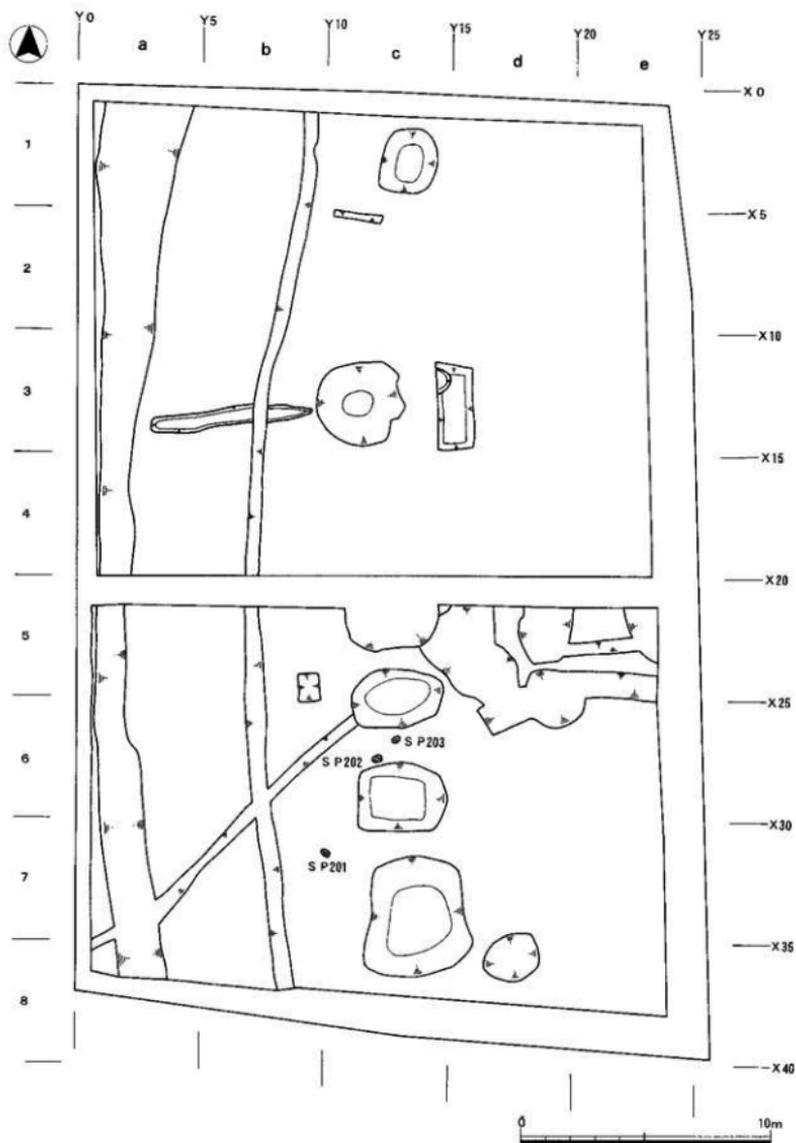
小穴(S P)

S P 201~203

第3区南部の6・7c地区で検出した。3点ともに楕円形を呈するもので、径0.2~0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は褐色系の粘土の単一層である。内部から遺物は出土していない。

参考文献

- ・横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
- ・尾上 実 1983「南河内の瓦器概」『藤澤一夫先生古稀記念論集 古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会(和泉型瓦器概の型式分類に使用)
- ・森島康雄 1992「畿内産瓦器概の併行関係と歴年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会(和泉型瓦器概の年代基準に使用)
- ・森島康雄 1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会
- ・森田 稔 1995「Ⅲ土器・陶磁器8. 中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- ・市本芳三 2001「大阪地域の平安時代後期瓦の様相」『第4回 摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け-11・12世紀の寺院の考古学的研究-』摂河泉古代寺院研究会・大阪府立弥生文化博物館
- ・市本芳三 2006「摂河泉の平安時代から鎌倉時代の軒瓦の様相」『財団法人大阪府文化財センター 研究調査報告 第4集』財団法人大阪府文化財センター
- ・近藤康司1991「摂河泉の古代寺院(三)和泉国大鳥郡塩穴郷 塩穴寺」『摂河泉会報 第16号』摂河泉地域史研究会
- ・吉田野々1992「太田遺跡出土の胎藏界中台八葉院梵字曼陀羅文軒瓦について」『摂河泉会報 第18号』摂河泉地域史研究会
- ・吉田野乃 1992「22. 太田遺跡(91-185)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査Ⅰ』八尾市文化財報告 25八尾市教育委員会



第47図 第3区 第2面検出遺構平面図(S=1/200)

第4章 まとめ

今回の調査では、第1面で平安時代後期から鎌倉時代中期、第2面で古墳時代中期に比定される遺構・遺物を検出した。なかでも、第3区の第1面では、西部で検出された南北方向に伸びる溝群の東側に12世紀後半から13世紀中葉にわたって継続した居住域を構成した、数多くの遺構が検出されている。これらの遺構からは、当該期の日常雑器が多量に出土した他、単独ないしは井戸側に転用された形で平安時代後期を中心とする屋瓦が多量に含まれていた。このような調査結果を受けて、調査時点では太田遺跡として周知されていたが、平成13年度以降には、太田遺跡範囲の大和川以南については津堂遺跡とし、そのうち屋瓦が出土した地点については、小字名から塔ノ本廃寺として認定される等の成果が得られている。

本調査地周辺においては、当調査研究会の他、大阪府教育委員会、藤井寺市教育委員会により発掘調査が実施されており、縄文時代後期以降の遺構・遺物が検出されている。以下、今回の調査で検出された古墳時代中期ならびに平安時代後期から鎌倉時代中期を中心に、既往調査成果から当該期の集落推移を概観する。

古墳時代中期

古墳時代中期のものとしては、3区の第2面で検出している。

調査地の西部に位置する府82-1では、南北方向に蛇行して伸びる自然河川が1条検出されている。検出部分で最大幅が12~16m、深さ3.5mを測るもので、出土した遺物の時期分布の偏在傾向から古墳時代前期後半(布留式新相)から古墳時代中期後半(5世紀後半)までの存続が想定される。この河川の西側に並行して検出された溝(W T S D04)が、田辺編年のTK208型式(5世紀中葉)時期のものであるため、この自然河川の西側付近に当該期の集落域が想定される。

一方、調査地より東部においては、府86-1の第2調査面で、大規模な土坑を伴う居住域が検出されており、TK208型式(5世紀中葉)時期の土師器・須恵器・製塩土器・滑石製品等の豊富な遺物が出土している。以上から、府82-1で検出された自然河川を挟んで当該期の集落域が東西に展開していたことが想定される。

平安時代後期から鎌倉時代中期

当該期の居住域は、本調査の西側で実施された府82-1調査地および南東側で実施された府86-1調査地、TD86-1調査地を含めて、現時点では東西約230m、南北約260mの範囲で当該期の居住域が確認されている。集落域の存続期間は11世紀後半から13世紀中葉である。この期間の集落域の変遷を概ね、①11世紀後半から12世紀前半、②12世紀中葉から13世紀初頭、③13世紀前半から13世紀中葉の3時期に区別して、居住域の移動および衰微の変遷を以下、通観してみる。

①11世紀後半から12世紀前半

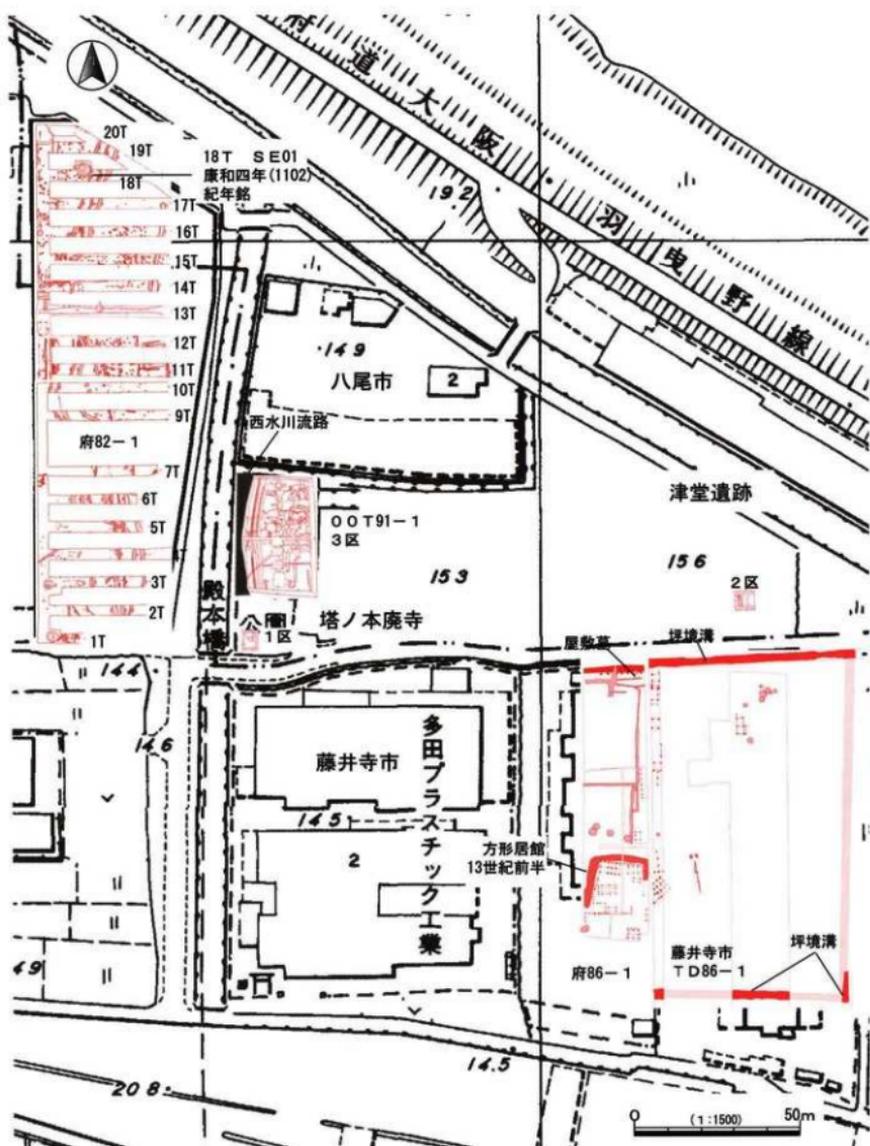
当該期においては、府82-1調査地北部の第14~18トレンチを中心とする居住域と、同調査地南部の第3トレンチを中心とする居住域がある。トレンチ調査のため、調査成果が断片的で資料の制約があるが、第14~18トレンチを中心とする居住域は、大規模な掘立柱建物群を中核とする建物構成で、東は南北に伸びる溝で画されている。南部においては、第13トレンチ付近が南限とされている。この第13トレンチでは坪境を区画する近世時期の溝が東西方向に伸びており、当地



第48図 調査地周辺復元条里区画と小字名図 (S=1/2500)

における条里区画の施行が当該期にまで遡る可能性があるとするれば、居住城南限区画の基準になった可能性がある。

また第18トレンチからは、多重に重ねた曲物と最上段に縦板組横棧どめを井戸側に使用した12世紀前半の井戸(S E01)が検出されている。そのうち、曲物井戸側の4～6断面と8段目に墨書が書かれていた。4～6段には「謹解申雑物進上名簿帳事合佰柒拾玖人平将胤絹百疋源親方敷二百疋藤原宗興練三百疋」、8段目には「康和四年四月廿三日守丸」が記されていた。4～6段の内容としては、平将胤、源親方、藤原宗興の三人が179人を代表して絹、穀織、練等の絹織物を進



第49図 調査地周辺における平安時代後期から鎌倉時代中期(11世紀後半から13世紀中葉)の検出遺構平面図
(S=1/1500)〔藤井寺市の地図データは山田幸弘氏(藤井寺市教育委員会)の提供による〕

上した内容が記載されている。4～6段目と8段目の筆跡が異なるため、進上の内容が康和四年(1102年)であったかの正否は不明であるが、当該期の荘園経営の一端を推定するうえで貴重な史料と言えよう。

一方、第3トレンチを中心とする居住域は、第3トレンチのS E 01を中心とするもので、遺構の配置から見て、調査地の西部一帯に展開したものと推定される。

②12世紀中葉から13世紀初頭

12世紀中葉では、前代の居住域に近接する府82-1調査地の第20トレンチを中心とする北西端、ならびに南西部の第1トレンチ付近で検出されている程度で、集落規模は前代に比して衰微傾向が窺われる。

続く、12世紀後半から13世紀初頭においては、①～③時期を通じて最も居住域が拡大・分散する時期にあたる。現在、八尾市と藤井寺市の市境を区画して南北方向に流下する西水川の古流路が、本調査の第3区の西部で検出されており、少なくとも当該期にはこの自然河川が存在したことが推定される。当該期の居住域は、この自然河川を挟んで、西岸では府82-1調査地南部の第1トレンチ付近、藤井寺市のNX S-II調査地(西集落)、東岸では本調査の第3区ならびに府86-1調査地(東集落)で検出されている。

なお、T D 86-1調査地では、条里地割の坪境を画する12世紀後半の区画溝が検出されており、条里区画に沿った開発が実施されていたことが窺われる。なかでも、本調査の第3区ならびに府86-1調査地、T D 86-1調査地を包括する東集落の遺構周密度が高く、中心的な役割を果たした居住域であったことが推定される。

一方、塔ノ本廃寺に関連するものとしては、本調査の第1・3区を中心に屋瓦類が多数出土している。12世紀代を中心とする屋瓦が中心で、この時期に新たに建立された寺院と考えられる。近藤康司(近藤1991)によれば、平安時代後期に新たに建立される寺院については、伽藍が整備されたものでなく、集落内寺院と言うべき小堂を一様程度建立する小規模なものが多いとされており、塔ノ本廃寺についても、このような性格を持つ寺院であったと推定される。第3区で検出した12世紀末に比定されるS E 104に塔ノ本廃寺の屋瓦が井戸側に使用されているため、この時期には既に廃絶していたことが推定される。

③13世紀前半から中葉

居住域としては、前代から引き続き東集落を中心に展開している。

東集落を構成する府86-1調査地、T D 86-1調査地付近では、一町四方が溝で画された区画内に掘立柱建物群を配する集落形態が執られている。さらに、府86-1区調査地では、南側を除く三方に「コ」の字形に溝を設け、南側が溝列で区画された東西約17m、南北約16mの範囲に掘立柱建物を配する13世紀前半の方形居館が存在している。西側の区画が小字「殿本(とのもと)」であることから、荘園領主の居館であった可能性が推定される。このような方形区画を有する居館の成立は、中井均氏(中井1991)によれば近畿地方では12世紀後半に出現したとされている。ただ、本例の区画溝は幅2m前後のもので、さらに溝と建物の間が接近しており、防御を目的とした土塁を持たない小規模なもので、主郭に付随した副郭的な性格の居館であったと推定される。この居館跡の北部には、壮年期の女性を横臥埋葬した同時期の土壌墓が1基検出されており、屋敷地の北辺の坪境周辺に屋敷墓が設けられていたことがわかる。

以下、①から③期に亘るこれら集落域の推移と周辺に存在した荘園との関係を推定してみたい。

当該期においては、調査地一帯は『和名類聚抄』国郡部による郷名では、丹北郡東部から志紀郡西部にあたる。棚橋利光氏による『八尾の条里制』(棚橋1983)によれば、郡単位の条里坪付から見て、丹北郡東端と志紀郡西端の郡界付近には1町分の間隔があるとされている。一方、西宮秀紀『藤井寺市史』(西宮1997)では、この1町部分を丹比郡十条に入れている。古代末から中世時期の郡界については、明確にし難い面があるが、推定される条里区画からみて八尾市内の津堂遺跡、塔ノ本廃寺の範囲は丹北郡の九・十条から志紀郡の五条にあたるものと推定される。そのうち、大半を占める志紀郡内の条里呼称については、永久四年(1072)九月五日の太政官牒の中で、志紀北条と南条の記載があり、南北に長い条里区画を南北で二分する呼称方法が取られていたようである。現在の藤井寺市北東部の北條町付近が旧村名では北条村にあたるため、この付近から北の地域を志紀北条、それより南を志紀南条とした場合、八尾市内の津堂遺跡・塔ノ本廃寺一帯は志紀北条の南西部にあると推定される。

平安時代中期以降、全国的に国衙の支配を離れた荘園が多数形成され、公領・公田が減少し、私領化・荘園化が進行する趨勢にあった。このような荘園化に対して、しばしば朝廷・政府からの荘園整理令が発令されている。なかでも、延久元年(1069)に後三条天皇が実施した荘園整理令は大規模なもので、社領・寺領が衰退を余儀なくされたようである。本調査地を含む志紀郡においても、永久四年(1072)九月五日の太政官牒によれば、志紀北条・南条にあった石清水八幡宮の田地十八町余りを始め9箇所が「籠作公田」として収公されている。その他、嘉承元年(1106)十月には、東寺が国司により収公された志紀郡内の荘田約二四町の返還を朝廷に訴え受理されている。このように、志紀北条・南条には、大寺社の荘園が数多く存在し、延久元年(1069)の荘園整理令以降においては、荘園経営に何らかの影響を与えたことが推察される。他にも、当該期の志紀北条一帯には、醍醐寺、興福寺、薬師寺別当領、安楽寿院等の荘園の存在が想定される。

棚橋利光氏は『八尾の条里制』の志紀郡条里のなかで、石清水八幡宮領の荘園には八幡宮が勧請された可能性が高いと言う前提で、八尾市太田にある太田八幡宮、藤井寺市小川の津堂二の丸にあった八幡神社から、石清水八幡宮の志紀北条の領地については、これらの八幡宮付近であったものと想定されている。当調査地一帯は、正にその付帯条件を備えた地点であり、調査成果からみても蓋然性が高いものと考えられる。①の時期とした府82-1調査地を中心とした11世紀後半から12世紀前半の居住域がこれらに関連する可能性があり、曲物に記された墨書内容が、延久元年(1069)の荘園整理令以降の荘園経営の実態を示すものと推定される。しかし、保元三年(1158)の官宣旨にはその名を残しておらず、この時期までには志紀北条内の石清水八幡宮の荘園機能が停止していたようである。

続く、②12世紀中葉から13世紀初頭時期は最も集落域が拡大する時期である。同時期の荘園は、仁平四年(1154)の『醍醐寺雜事記』によれば、醍醐寺領が「郡庄田五十町 志紀南五十三町五段二百八十歩 同北五十六町五段六十歩」あったとされている。

当該期においては、居住域の拡大傾向に相応して、本調査地1区付近に塔ノ本廃寺とされる集落内寺院の成立をみている。塔ノ本廃寺の創建瓦としては、梵字曼陀羅文軒丸瓦と梵字唐草文軒平瓦の組み合わせが想定される。屋瓦からみて真言宗系を宗旨とする寺院であったと推定され、塔ノ本廃寺の北側に隣接する小字「高野所」についても、このような宗教的な関係で名付けられ

た小字名であった可能性がある。したがって、本調査地一帯で検出されている当該期の居住域が醍醐寺領の志紀北荘の荘園を管理した領主・荘民の集落であった可能性が推定される。

一方、塔ノ本庵寺の創建瓦のうち梵字曼陀羅文軒丸瓦については、蓮華文八弁に胎蔵界曼陀羅の中台八葉院を梵字で表したもので、同意匠のものが塩穴寺(堺市)、観心寺(河内長野)、当麻寺(香芝市)から出土している。梵字唐草文軒平瓦については、キリークの梵字を中心飾りに持つもので、市本芳三氏分類(市本2001)の梵字唐草文J-6に分類され、日置荘遺跡(堺市)、岡2丁目遺跡(松原市)、はさみ山遺跡(藤井寺)から同范のものが出土している。塩穴寺、観心寺は寺院跡から出土のもので、松原市岡2丁目地点出土の瓦も近接した法源寺のものとして推定されている。塩穴寺を除けば、いずれも創建時期は真言宗系を宗旨とする寺院であり、塩穴寺についても平安時代後期においては観心寺領であった関係から梵字曼陀羅文軒丸瓦が採用されたものと推定される。

このように、創建瓦の意匠分布の偏在性から勘案すれば12世紀中葉から後半時期において、荘園管理領主と観心寺に関連した屋瓦供給集団との間に、何らかの有機的な関係があったことが推定されよう。

③13世紀前半から13世紀中葉においては、府86-1調査地およびTD86-1調査地周辺で条里区画に規制された空間に、方形区画の荘園領主の居館が出現しており、散村から集村景観を持つ集落形態へ移行したことが窺われる。

註記

註1・承安二年(1172)『佐伯景弘持経者注進状』の丹比郡松原の法源寺

- 西川寿勝他 1993『岡2丁目所在遺跡発掘調査概要報告書-松原市岡2丁目所在-』大阪府教育委員会
- ・大野 薫他 1986『松原市観音寺遺跡 第2次発掘調査概要 近畿自動車道と歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターでは観音寺に比定されており、真言宗の寺院とされている。

参考文献

- ・棚橋利光 1982『八尾の条里制』『八尾市紀要 第6号』八尾市史編さん室
- ・宮川 満 1985『第一章 中世前期の丹比地方』第二章 中世後期の松原』『松原市史』松原市市史編さん委員会
- ・近藤康司 1991『摂河泉の古代寺院跡(三)和泉国大鳥郡塩穴郡 塩穴寺』『摂河泉会報 第16号』摂河泉地域史研究会
- ・中井 均 1991『中世の居館・寺として集落-西国を中心として-』『中世の城と考古学』新人物往来社
- ・阿部幸一・岩崎二郎 1992『津堂遺跡』『大阪府文化財調査報告書第43輯』大阪府教育委員会
- ・吉田野々 1992『太田遺跡出土の胎蔵界中台八葉院梵字曼陀羅文軒丸瓦について』『摂河泉会報 第18号』摂河泉地域史研究会
- ・堀内利明 1996『日本荘園データ1(畿内・東海道・東山道)3河内』『国立歴史民俗博物館資料調査報告書6』
- ・西宮秀紀 1997『古代 第三章 第五節』『藤井寺市史 第一巻 通史編』藤井寺市史
- ・河谷能平 1999『第1章 中世前期の丹南地方』『松原町史 第1巻』松原町

- ・市本芳三 2001『第4回 摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け-11・12世紀の寺院の考古学的研究-』摂河泉古代寺院研究会・大阪府立弥生文化博物館
- ・沢井浩三 1988「第三章 中世」『八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
- ・山田幸弘 2007「藤井寺歴史紀行①～③」藤井寺市

圖 版



第1区 第1面全景(南から)



第2区 第1面全景(西から)



第3区 第1面北部遺構検出状況(東から)



第3区 第1面南部遺構検出状況(東から)



第3区 SE101検出状況(北から)



第3区 SE102検出状況(西から)



第3区 SE103検出状況(北から)



同上 瓦積み井戸側検出状況(西から)



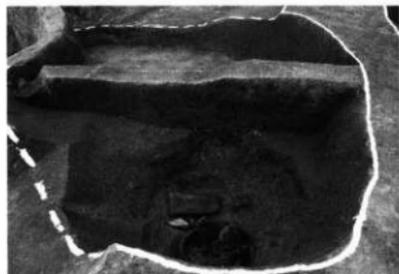
同上 瓦積み井戸側検出状況(北から)



同上 井戸側断割り状況(南から)



同上 井戸側下部曲物検出状況(南から)



第3区 SE104検出状況(南から)



同 井戸側検出状況(北から)



同 井戸掘方(北から)



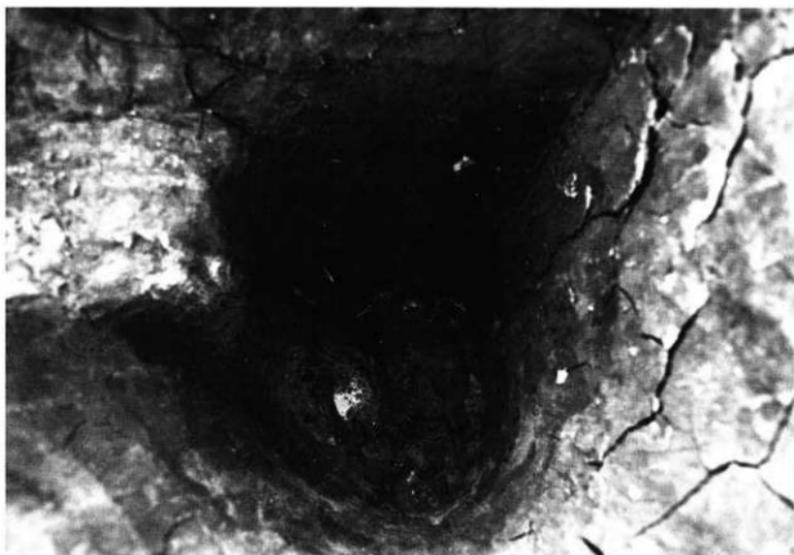
同 井戸掘方内遺物検出状況(北から)



第3区 SE105検出状況(北から)



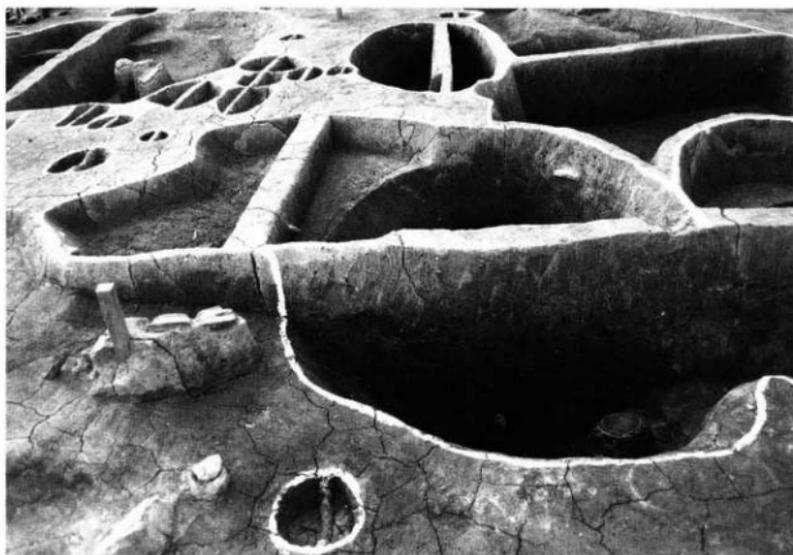
第3区 SE106検出状況(東から)



同上 遺物出土状況(東から)



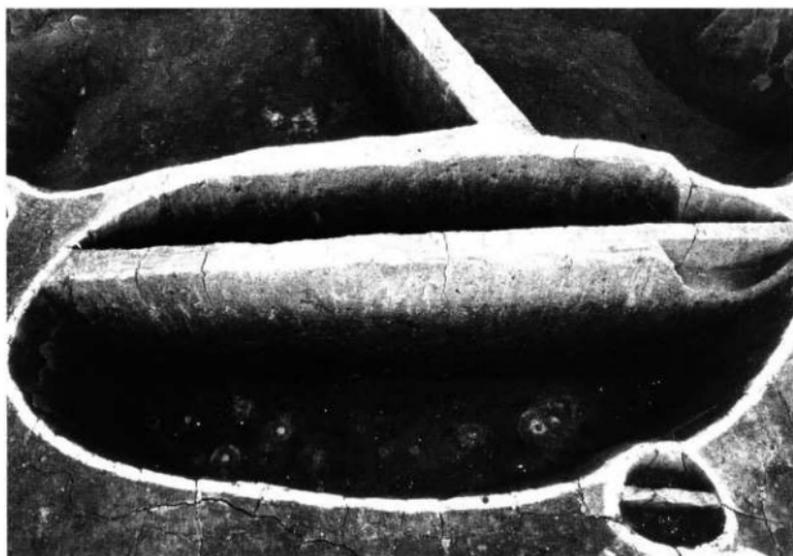
第3区 SE106断面(東から)



第3区 SE107検出状況(東から)



第3区 SK107検出状況(南から)



第3区 SK108検出状況(南から)



第3区 SK109検出状況(南から)



第3区 SK110検出状況(西から)



第3区 SK111検出状況(西から)



第3区 SK112検出状況(南から)



第3区 SK113検出状況(南から)



同上 遺物出土状況(南から)



第3区 SD101検出状況(北から)



第3区 SD103検出状況(南から)



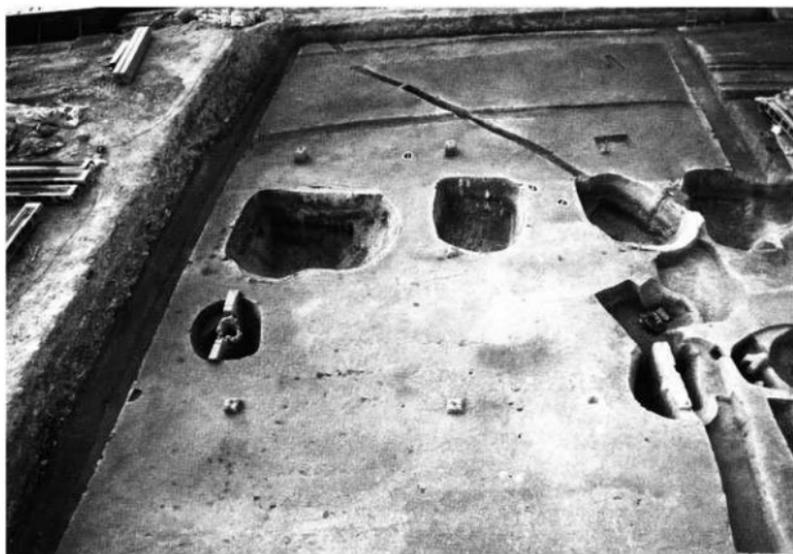
第3区 SD116・117検出状況(東から)



第3区 SP144検出状況(東から)



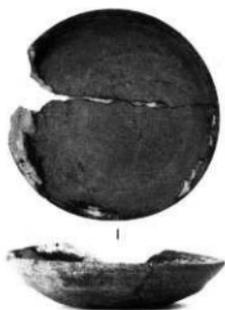
第3区 第2面北部全景(東から)



第3区 第2面南部全景(東から)



1



6



2



7



3

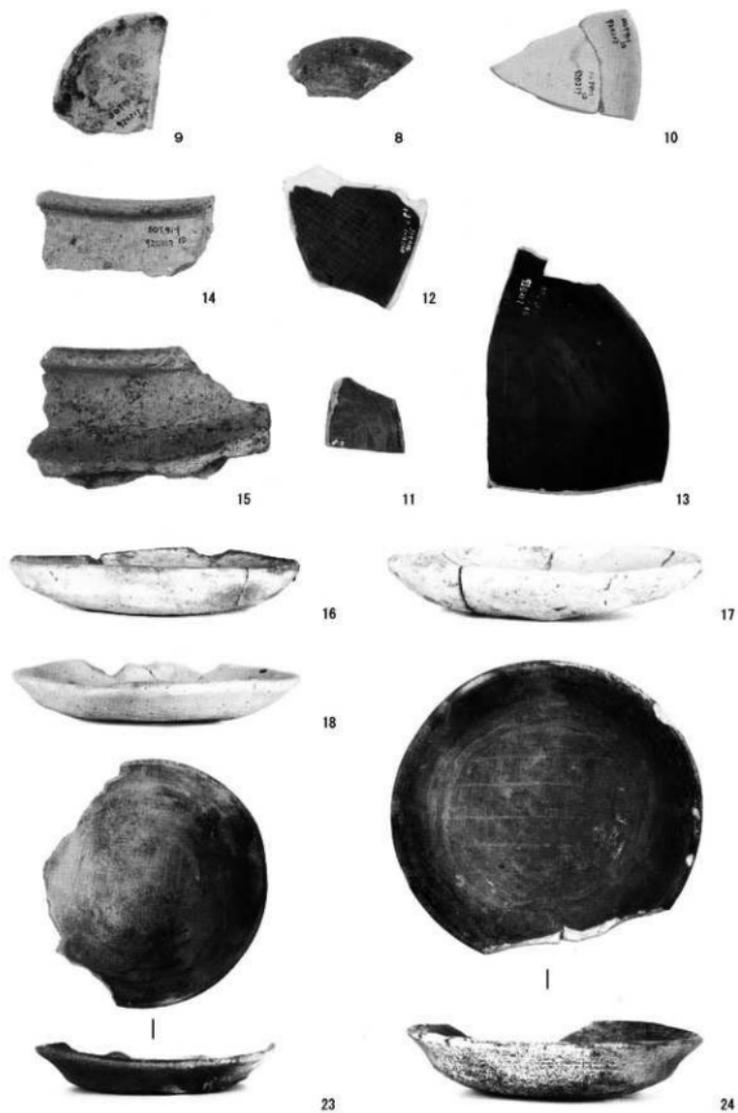


4



5

第1区 SK101(1·2)、第1区第1层(3~5)、第2区 SD101(6·7)出土遗物



第3区 SE101(8~15)、SE102(16~18·23·24)出土遺物



25



27



26



28



29



31

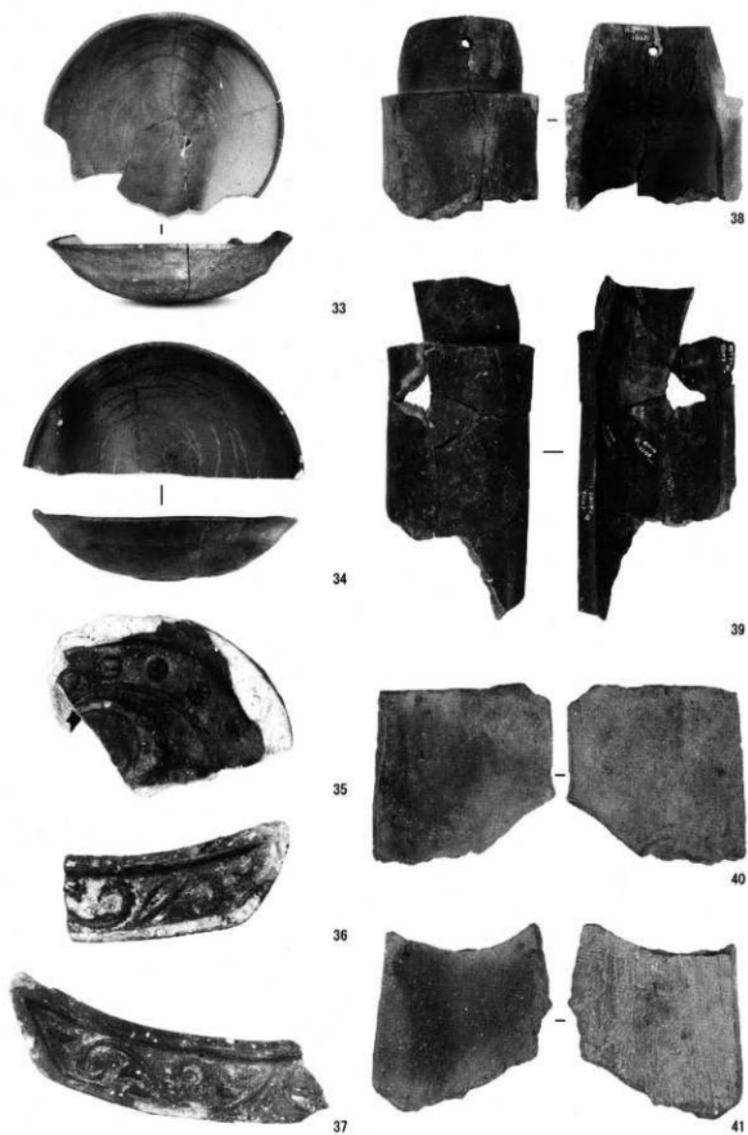


30



32

第3区 SE102(25~28)、SE103(29~32)出土遺物



第3区 SE103(33~41)出土遺物



42



43



60



44



45



46



47



48



49



50



52



54



55

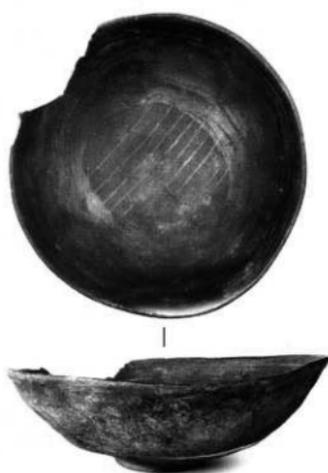


56



57

第3区 SE103(42·43)、SE104(44~50·52·54~57·60)出土遺物



61



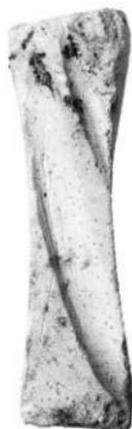
62



63



64



65

第3区 SE104 (61~65) 出土遺物



66



67

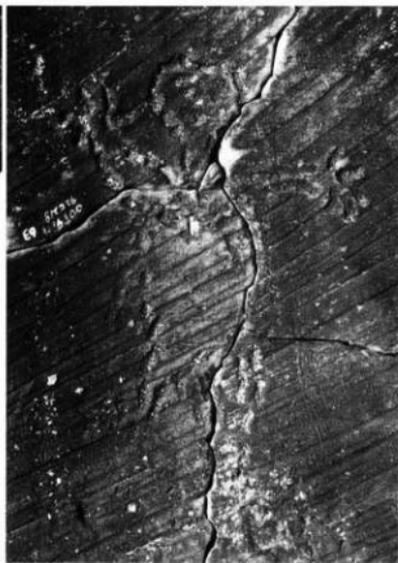
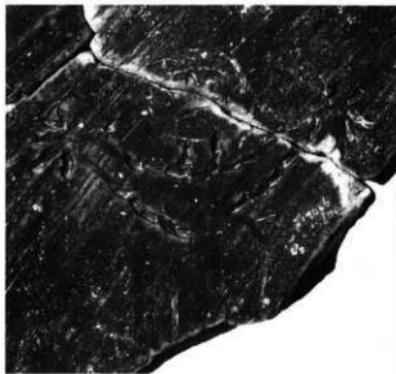


68

第3区 SE104(66~68)出土遗物



69



69(部分)

第3区 SE104(69)出土遺物



70



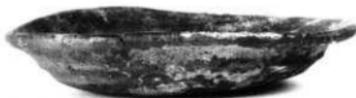
71



72



73



74



76



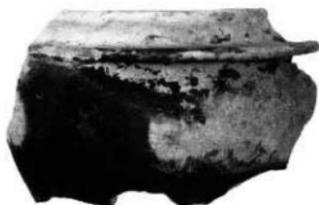
77



78



81

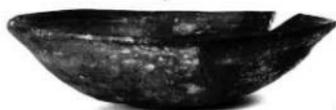


82

第3区 SE105(70~74·76~78·81-82)出土遺物



79



80



83



86



84



87



85

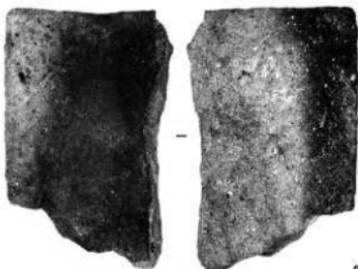


88

第3区 SE105(79·80·83~88)出土遺物



89



90



91



93



94



96



97

第3区 SE105(89~91)、SE106(93·94·96·97)出土遺物



98



99



100



101



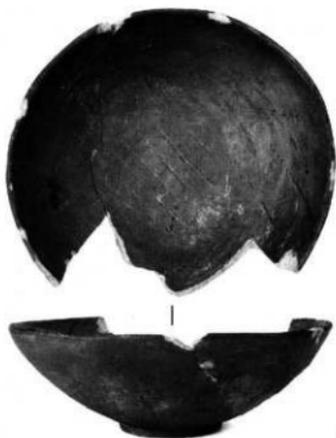
102



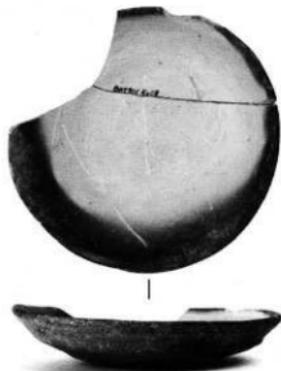
103



104



105



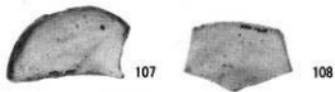
113



106



115



107

108



117



109



118



110

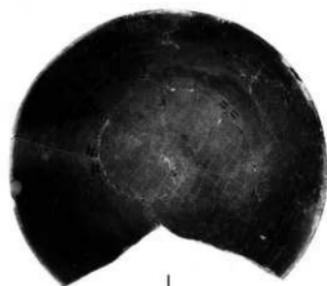


127



112

第3区 SE107(105·106)、SK102(107~109)、SK105(110·112·113·115·117·118)、SK107(127)出土遺物



131



132



133



135



134



136



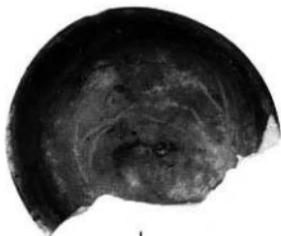
137



138



139



140

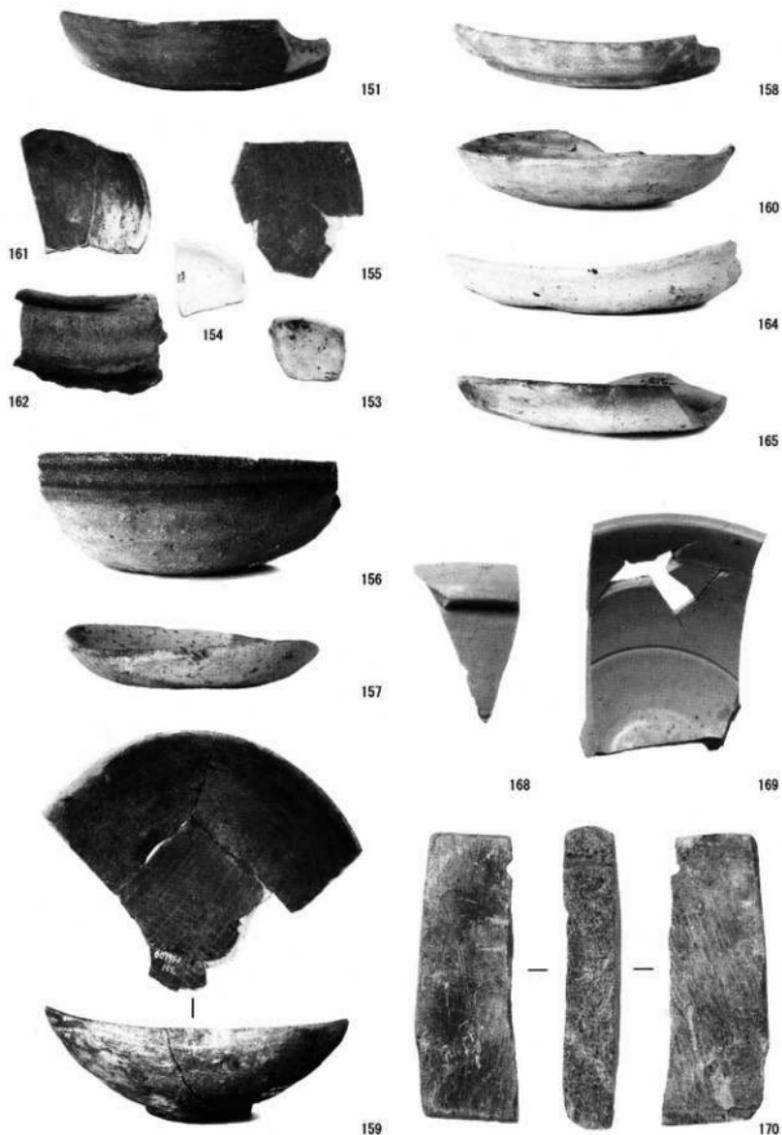


141

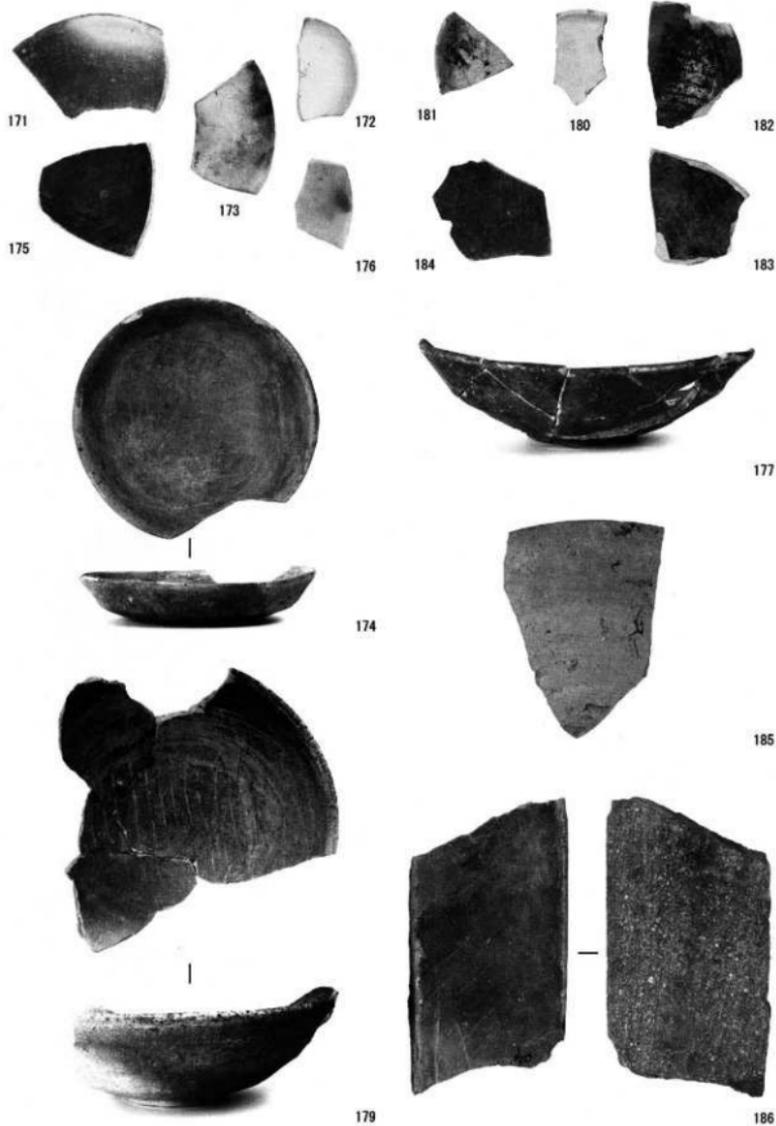
第3区 SK107(131~135)、SK108(136~141)出土遺物



第3区 SK108(142~146・148)出土遺物



第3区 SK110(151)、SK111(153~156)、SK112(157~159)、SK113(160~162)、SD101(164・165・168~170)出土遺物



第3区 SD103(171~176)、SD108(177·179)、SD109(180~186)出土遺物



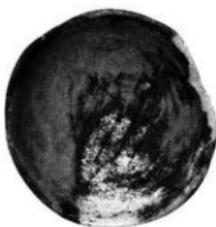
187



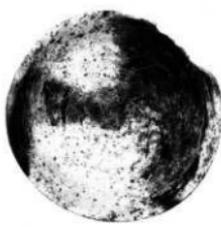
188



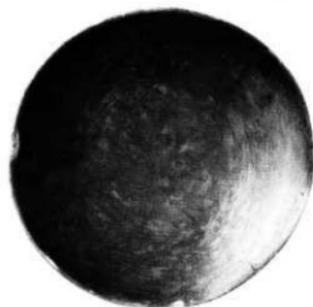
189



190



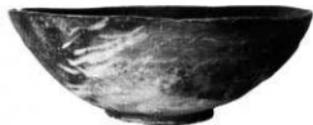
191



192



193

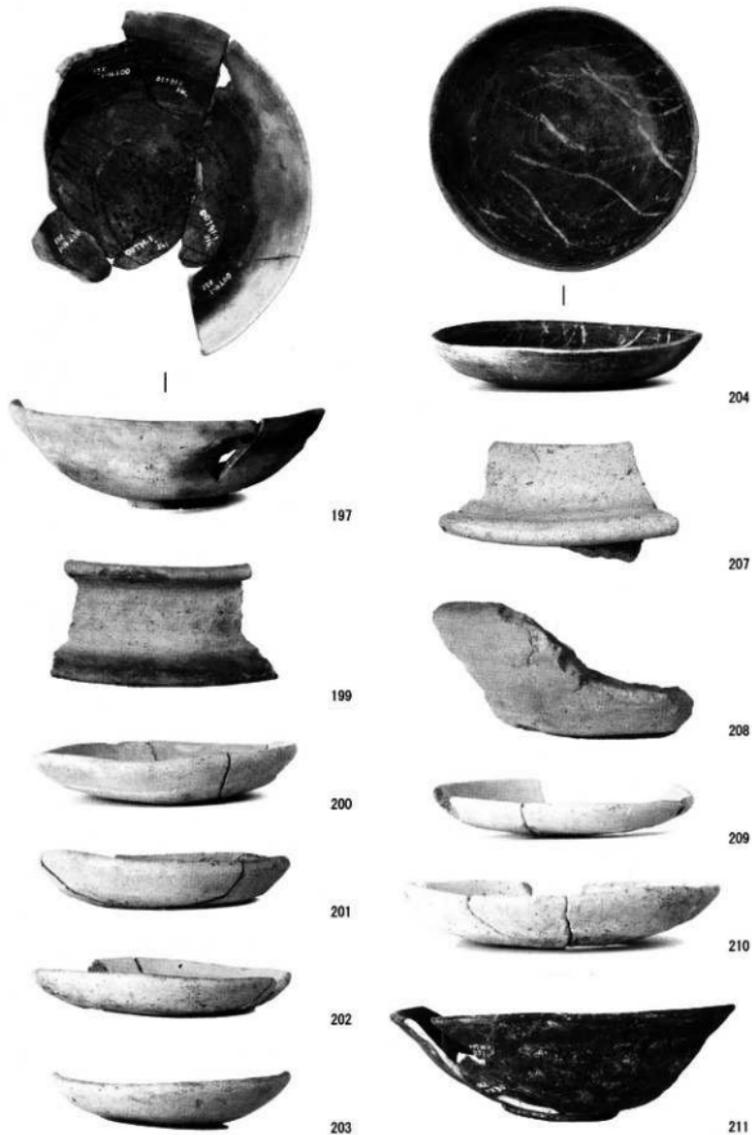


195

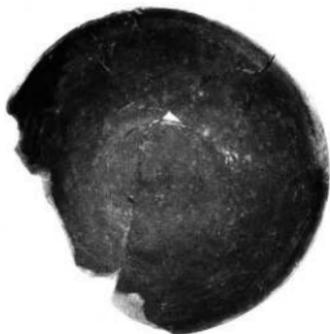


196

第3区 SD113(187~193 - 195)、SD114(196)出土遺物



第3区 SD114(197·199)、SD116(200~204·207·208)、SD117(209~211)出土遺物



218



212



213



220



216



221



第3区 SD120(212)、SD122(213·216·218)、SP144(220·221)出土遗物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく108
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告108
副書名	太田遺跡第1次発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	108
編著者名	原田昌則
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX072-994-4700
発行年月日	西暦2008年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
太田遺跡 (第1次調査)	大阪府八尾市太田九丁目	27212	70	34° 35' 1"	135° 35' 25"	19910128 ～ 19910323	約1,000㎡	調整池等建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田遺跡 (第1次調査)	集落	古墳時代中期	小穴	土師器・須恵器	
	集落	平安時代後期～鎌倉時代中期	井戸・土坑・溝・小穴・柱穴	土師器・須恵器・瓦器・中国産磁器・屋瓦・石製品	

要約	古墳時代中期においては、小穴および遺物包含層を確認している。平安時代後期から鎌倉時代中期(11世紀後半から13世紀中葉)については、居住域に関連した遺構が密集して検出されている。また12世紀代に比定される、梵字曼陀羅文軒丸瓦、梵字唐草文軒平瓦が出土しており、この時期に建立された集落内寺院が想定される。なお、平成13年度以降、調査地点付近は津堂遺跡・塔ノ本庵寺に遺跡名が変更されている。
----	---

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告108
太田遺跡第1次発掘調査報告書

発行 平成20年3月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX(072) 994-4700

印刷 併近畿印刷センター
〒581-0033 八尾市志紀町南二丁目131番地
TEL(072) 920-3488
FAX(072) 920-3455

表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 マットアート <110Kg>

